

二〇二六年(令和八年)三月

東京阿部家資料

文書編(15)

福山市教育委員会

目次

凡例

『奏者番心得九冊物』四卷について

『奏者番心得九冊物』四卷

披露之席部 1

御太刀畳目并進物置所之部 2

披露仕様并心得之部 10

御太刀披露之部 51

長袴披露之部 53

半襠披露之部 54

披露割之部并手札心得 56

披露割 56

年始披露割 57

手札認様之事 61

手札表大方 63

御三家陪臣披露 77

成瀬之部 78

竹腰之部 83

石河之部 85

渡辺之部 87

水野之部 91

安藤之部 94

中山之部 96

志水之部 97

山野辺之部 100

寺社披露之部 102

凡例

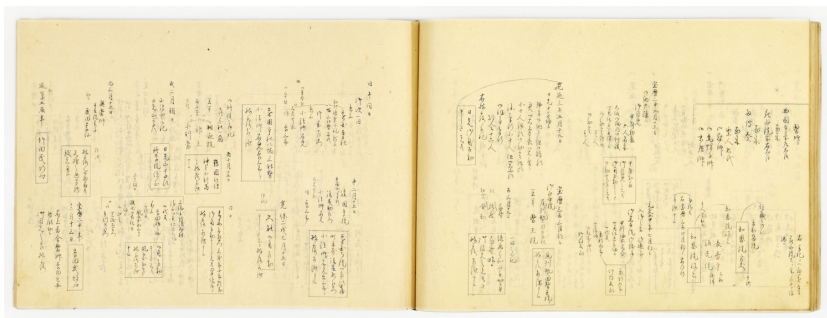
- 一 旧福山藩主阿部家（東京阿部家）より福山市に寄贈いただいた資料『御奏者番心得九冊物』の第四冊目を、「四巻」として翻刻・収録した。（第五冊目以降も順次刊行予定）
- 一 文書の収録については、原則として原文の形に添うように努めたが、内容に正確を期し、読者の便を図るため、次のように編集した。
 - 1 漢字の字体については、原則として新字体を用いた。別体・旧字・異字等はつとめて通行の表記に統一したが、そのまま用いたものもある。
 - 2 旧仮名遣い、および「ㇿ（より）」は、原文のまま記した。
 - 3 平出・欠字は省略した。
 - 4 誤字や当て字は原則原文のまま記し、行間に括弧で適切な文字を記した。意味が不明な文字は（ママ）と記した。
- 一 朱書・朱線については、灰色で表した。
- 6 読者にわかりやすくするため、読点（、）を付けた。
- 7 判読できなかった文字は□とした。判読に疑念が残る文字は行間に（○カ）とした。
- 8 目次・ページ上部の章題は本文中の表記に合わせた。
- 一 本書の編集は、福山市経済環境局 文化観光振興部 文化振興課 まなびの館ローズコム 歴史資料室の桑田直美・有木歩があたった。
- 一 本資料を含む資料群は二〇二五年三月に「阿部家資料」として福山市重要文化財に指定されたが、既刊本の続編であることに鑑み、表題は「東京阿部家資料」とする。

『御奏者番心得九冊物』四巻について

本書『御奏者番心得』は幕府で要職を担った阿部家代々に受け継がれた奏者番としての先例集である。全て揃っているものは「九冊物」と呼ばれ、阿部家資料にはその全九冊が揃って『御奏者番心得九冊物』として残っている。昨年度までに『御奏者番心得』一〜三巻を翻刻・刊行しており、本資料はそれに続く四巻目である。

四巻では奏者番の主な仕事である披露に関して、貞享二年（一六八五）〜安永二年（一七七三）までの事例を数多く収める。奏者番は月次^{つきごひ}、節句、就任、参勤交代の御礼といった場面において大名・旗本が将軍に拝謁する際、その姓名や献上品を将軍に披露し、将軍より下賜される品の伝達にあたった。大名・旗本の家格に応じて拝謁の場所・席次が畳の位置にいたるまで厳格に決められ、献上品も同様に置く位置・置き方が決まっていた。また披露の方法や着用する礼装は場面によって異なるため、覚えるべき事柄は膨大な量であった。そのため本資料のような心得や留書を参考書として使用していたと考えられる。

今後も『御奏者番心得』の続巻を翻刻・刊行していく予定である。



御奏者番心得九冊物 四卷

披露致候席之覚一

御太刀畳目並進物置所之部二

披露仕様並心得三

御太刀披露之部四

長袴披露之部五

半袴披露之部六

披露割之部並手札心得七

御三家陪臣披露八

寺社披露之部九

披露之席部

一月次之御礼四品以上之名披露之節御下段角柱ニ左之肩を附候

程ニ寄添罷在候

但四品已上名披露濟少シ頭を引追而松平左兵衛佐御目見之

節又少シ進候而披露、直ニ退申候

一御白書院御黒書院ニ而惣而名披露之節御障子より二畳目ニ御所之方江角ニ向候、月番座前をかねにいたし夫方先江者出不

申候

一節句大広間ニテハ披露者無之候得共披露之心ニ而月番老中着

座之脇掛板御下段角之柱ニ寄添御敷居ニ手を突医師着座之方

を向罷在候

一八朔右同断、当番大広間ニ而引太刀不致候

一御白書院御黒書院御勝手方之披露、月番老中着座之例敷居ニ

手を突致披露候

一帝鑑之間御立座披露ハ御縁通若年寄衆次ニ御障子を後ニいた

し罷在候

一御納戸構披露之時ハ御障子之方二本目之柱を後ニいたし渡御

之方を向罷在致披露候

一御黒書院御勝手披露之節ハ羽目之間之上角之御柱を二尺下り

御立座之方を向罷在候

一山吹之間ニ而披露之節ハ山吹之間角羽目之間江附方ニ而渡御之方を向罷在候

附御黒書院御勝手披露ニ付相廻り候節山吹間羽目之間江附候方之障子を明罷通候

御太刀疊目并進物置所之部

天和三亥年四月三日

一御礼之節四品已上之面々披露之太刀目録、自今已後奏者番披露可致旨戸田山城守殿土井周防守江被仰渡候

一壺万石已上之面々年頭ニ煩差合ニ而追而御礼或官位或八朔等

之太刀目録持参候而御礼有之節太刀引候役人ハ番頭勤之、

前々此御礼之節ハ仮者四人御礼衆有之候得者引太刀之番頭ニ

人罷出壺人ニ而二人前ツ、引被申候へ共、引太刀之輩茂御礼

之人数程罷出引候様ニと被仰出候而其通ニ相極候

但番頭引候太刀ハ八朔大広間ニ而引申候、官位御礼ハ御白

書院ニ而も御黒書院ニ而も番頭引申候、其外四品以上ハ壺

人ツ、御奏者番披露、引太刀奏者番引続番頭引太刀諸大夫

無官ニ而も表高家之分ハ勤之、尤常ニハ諸大夫無官又者共

ニ壺人ツ、奏者番披露、引太刀茂奏者番引二三人出候而茂

同断

同断

一御礼衆大勢一同ニ罷出候時者御太刀を置披候而致披露候得共

小勢之時ハ披候ハ、目立可申与いかゝ可仕哉与相伺可然与同

役衆申談御用番河内守殿江当番对馬守伺候処、御相談可被成

与被仰候、其後被仰聞候者尤二思召候間小勢ノトキハ披申候

二不及候、大勢ノトキハ披可致披露旨被仰聞候、依之今日者御

太刀持出置候与其俣罷在披露候事

付札 是ハ有章院様御時代、只今ハ前々之通御礼衆耆人充

出

大納言

一御太刀 御黒書院ニ而ハ御上段ヨリ下江二疊目之中、但シ中

之敷居方上江五疊目之中也

一右同断 御白書院ニ而者御上段方下江三疊目之上

但下方五疊目之上也

献上物之台者御敷居之内江卷ツ入レテ置之

但台二ツ入候事茂有之

中納言

一御太刀 御黒書院ニ而者御上段方下江三疊目之上、但シ下方

四疊目之上也

一右同断 御白書院ニ而ハ御上段方三疊目之下、但下方五疊目

之下也

献上物大納言同前、但尾張殿中納言成之御礼之節ハ馬代

時服台卷ツハ御敷居之内中二入之、紀伊殿同前御礼之節

者馬代之台計内江入ル

宰相

一御太刀 御黒書院ニ而者御上段方三疊目之下、但御敷居方四

疊目之下也

一右同断 御白書院ニ而ハ上方四疊目之下、但御敷居方四疊目

之下也

献上物大中納言同前

但水戸殿宰相成之御礼之節茂馬代者御敷居之内時服台者

皆外ニ置候由、松平加賀守宰相成之時も同前之由、御入輿

已後水戸殿御礼之節茂同前

中将

一御太刀 御黒書院ニ而ハ御敷居方上江三疊目之上

一右同断 御白書院ニ而ハ御敷居方上江三疊目之上

献上物同前

但松平加賀守中将之時參府之御礼ニ台二ツ御敷居之内江入候、是ハ御敷居之外ニテ御礼之所ヲ御三家等ハ御敷居之内ルテ御礼故台ツ入候義歟

少将

一御太刀 御黒書院ニテハ下方上江二疊目之下

一右同断 御白書院ニテハ下方二疊目之上

献上物右同断

但元禄十四八月廿八日松平出雲守娘婚姻之御礼之節時服

四御敷居之外壹疊目ニ置之、台二ツ之時ハ内壹疊目江一

ツ入候事も有之、尤老中被仰候朽木伊予守承之

侍従

一御太刀 御黒書院ニテハ下方一疊目之下

一右同断 御白書院ニても同断

献上物馬代壹計御闕之内江入之、馬代ニテ無之進物ハ御

敷居之外一疊目方段々下江置之

但御詰衆之侍従箱肴御敷居下方二疊目置候例有之、御一

門方之鹿子大納言^(庶方)之御息等ハ無官ニても侍従之格式也、

松平内蔵頭同主税頭杯之節右之格式也

侍従ニテ候得者御詰衆ニても誰ニても進物計之時ハ御

附礼 闕之外壹疊目也、進物馬代添候時ハ馬代者内江入、馬代

計時ハ御敷居之外壹疊目縁際ニ置

四品

一御太刀 御縁類下方三疊目之中ニ置之、但御闕下方江二疊目也

献上物拾万石以上五位ハ不及申無官ニても四品同前之格

式也、但御詰衆ナトハ少輕也

御家門之御連枝御嫡子無官可有品国持大名之嫡子右三格何

茂四品同前也、然共依人少々差別可有之歟能々可承合、但中

将少将侍従等之嫡子如左国持大名ニても父四品タラハ又可

差別也

誰ニても四品之子ハ諸大夫之格也、侍従之子四品ニ准候

も有之、人ニより諸大夫之通ニ而相濟候事も有之、如何之

節者可相同事也

一中将少将已上之家ニテ四品之無之格之御家門并国持大名家督

之無官何茂侍從之格式也

例

享保六丑年四月十五日

当番
高木主水正

一松平浅五郎次目名代御礼之節

披露
内藤丹波守

右井上河内守殿江伺之上披露進物侍從之通致候様二御差

図有之、其通相濟候

宝曆十四申六月朔日

当番
大岡兵庫頭

一松平新十郎家督御礼之節

披露
松平和泉守

右松平右京大夫殿江伺之上披露進物侍從之通致候様二御

差図有之、其通り相濟着座有之

一侍從之家之御家門并国持大名家督之無官四品之格式也、嫡子

是又四品之同格也

是其節可伺

侍從之家二而家督之無官四品之通相濟候例

享保三戌年十一月廿八日

当番
松平備前守

一宗式部繼目之御礼之節戸田山城守殿江相伺四品之通相濟

申候

享保三戌年六月朔日

一松平大學頭嫡子丹波守初而御目見之節例知レ兼候二付水

野和泉守伺之上四品之通相濟申候

享保四亥年四月廿八日

当番
高木主水正

一松平土佐守嫡子大助御目見之節井上河内守殿江伺之上四

品之通相濟申候、但御家門方国持大名少将侍從之家たり

とも其時四品タラハ嫡子又差別可有之候事

宝曆六子四月朔日

一松平大學頭嫡子徳之進初而御目見之節隱岐守殿江以春阿

弥伺四品之格二相濟候

宝曆十二年五月十五日

当番
松平備前守

一宗真之助相続之御礼之節伺之上四品之格二相濟申候

宝曆十三未二月十五日

当番
牧野遠江守

一松平土佐守嫡子国松初而御目見之節松平右京大夫殿江伺

之上四品之格二相濟申候

五位之諸大夫已下無官モ

一御太刀 御縁類より二疊目之中

一万石已下太刀披露二疊目之内少下二可置心得之事

正徳四年四月十五日

当番
三浦壹岐守

向後諸大夫ニても城主之御礼之節御太刀少シ上候而置候様

ニと久世大和守殿被仰聞候ニ付、下_方二疊目ニ差置候様ニ

申合候旨廻状ニ申来候

献上物も下_方二疊目

一万石已下太刀披露之節進物無之候得共御目通り中ニ置候、四

品已下者進物無之候共中江者出不申候、中_方脇一疊目ニ差置

候

一御勝手之太刀ハ

(陪)
倍臣

一御太刀 御縁類下より二疊目之下

献上物同断

一御太刀 疊目之儀元禄十二年四月廿四日田村右京大夫小笠原佐

渡守殿江被相伺相定ル

一御黒書院御白書院共ニ前々ハ御老中御太刀披露被成候、御敷

居之内ニ而小サ刀指シ披露被成候、引太刀ハ御敷居之内ニ候

得者小サ刀帶シ不申候、享保元年四月被仰出有之候以後御敷

居之内共ニ小サ刀帶申候

一享保七寅年六月晦日

当番
松平能登守

山城守殿、因幡殿相模殿拙者三人江御口上ニ而被仰聞候之趣

左之通

一上杉喜平様明日継目之御礼有之候、前々者真之御太刀上り

候得共作り太刀ニ而御礼申上御刀上り申候

一例之通進物出太刀折紙ニ而披露、進物番進物引之御刀指出

太刀之疊目ニ差置月番老中之方江披キ披露無之、尤御刀之

銘も不申喜平様罷出山城殿御取合相済上意有之、御敷居之

内江入候時喜平様後ロヲ通り引之可申由牧野因幡守松平相

模守松平能登守江山城守殿被仰渡候

但御太刀兩人ニ而相勤候筈ニ候

明和四亥年十二月十二日

当番
朽木土佐守

松平右近将監殿御渡候御書付写

大広間御礼申上候面々持参御太刀置所疊目

年始

中将

御下段下より四疊目二置
三疊目二而御礼

少将

御下段下より三疊目二置
二疊目二而御礼

侍従

御下段下より二疊目二置
一疊目二而御礼

四品

御下段御敷居之内一疊目二置
板縁二而御礼

八朔

中将少将侍従之無差別御下段下より二疊目二置之一疊目

二而御礼

四品

御下段御敷居之内二置之
板縁二而御礼

右之通大広間二而御礼申上候面々為心得寄々可被相達置候

十二月

明和五子年五月六日

当番
牧野越中守

五月五日御礼已前松平右近将監殿御渡候書付写

御奏者番衆

大目付江

大広間二而御礼申上候面々持参之御太刀置所疊目之儀、先

達而相達候書面之内八朔中将持参之御太刀御下段下より三

疊目二置其疊二而御礼可申上候、其外先達而相達候通たる

へく候、且又五節句御礼疊目茂八朔之通たるへく候

右之通可被相達候

五月

五月五日御礼以後松平右近将監殿御渡候御書付写

大目付江

大広間二而御礼申上候面々八朔少将持参之御太刀御下段下

より二疊目二置其疊二而御礼、侍従八御太刀同断二疊目之

下二置一疊目二而御礼可申上候、且又五節句御礼疊目も八

朔之通たるへく候

右之通可被相達候

五月

寛延二己巳年三月

進物疊目之書付

進物番方出ル

一侍従

馬代御闕之内際
長台同外志疊

一四品

馬代御闕之外壹疊
長台同外二疊

一諸大夫

馬代御闕之外二疊
長台同外三疊

但馬代計之時者長台之所二置

一大納言 御闕之内三疊

一中納言

一參議 御闕之内二疊

一中將

一少將 御闕之内壹疊

一拾万石以上者諸大夫二而も四品之通二置

但嫡子者諸大夫之通二近例差置

一無官二而茂国持大名之嫡子者四品二准

一侍從之嫡子二而も拾万石以下者諸大夫之通二置

一無官之進物諸大夫之通二置

一家中者之進物御闕之外三疊之下置

一兩本願寺御闕之内五疊

但御上段之方三疊目四疊目五疊目と置

一増上寺御闕之内三疊

但住職之御礼長、名代之時半

一一心伝 同断

一知恩院 同断

但入院住職之御礼長

使僧之時者半

一大僧正

一権僧正

一正僧正

一紫衣

一伝通院

一觀理院

右何茂御闕之内式置

一院家坦林一派之持本地之僧進物御闕之外式置

一神主並之僧御闕之外三疊

一若王子住心院進物薰袋御闕之外壹疊

一加茂之葵御闕之内際

一御礼御洗米御闕之内際

但近年御前江不出

一 醫師法印法眼御闕之外三疊

一 職檢校御闕之外三疊

一 国持大名侍従以上使者を以之進物台者御闕之外壹疊、御樽

肴御肴者式疊目御樽者三疊目

但御樽肴計之時者壹疊目二疊目差置

一 侍従半年代或ハ湯治婦病後杯之御礼箱肴御闕之外二疊目之

上、四品者二疊之下二置

一 公家衆御暇被下物、大納言御闕之内三疊方御上段之間江置

一 中納言御闕之内式疊方御上段之方江置

一 公帖御白書院御闕之内二疊、金地院江被下物御白書院御闕

之内式疊目

例書

享保元七月

一 専修寺門跡使者進物

金馬代御闕之内四疊目

同号二十一月

一 井伊掃部頭少将婚姻之御礼時服外壹疊置

同号三四月

一 細川越中守参勤之御礼銀三百枚時服二拾羅紗拾間猩々緋拾

間

右之内銀二百枚拾十羅紗猩々緋五台出ル

同号三十月

一 水戸殿御礼御黒書院銀五百枚時服式拾

内銀四百枚西湖之間江入

同号三十一月

一 松平薩摩守中将参勤銀五百枚時服二十

内銀三百枚出ル

同号六四月

一 松平大隅守侍従家督御礼銀千枚時服五十

内三百枚時服二十出ル

同号六七月

一 喜連川左兵衛督繼目之御礼金馬代御闕之内二疊、蠟燭外一

疊

同号十月

一松平左京大夫少将湯治帰御礼箱肴外壹量

同号十一月

一松平下総守少将娘之婚姻御礼巻物御鬩之内際

宝曆十三六月

一藤堂和泉守少将日光帰り岩茸一箱御敷居之外壹量目

侍従之家二而家督之無官侍従之格相濟家格

享保九辰年七月廿八日

一松平亀丸家督之御礼名代二而申上候節、安藤対馬守江相伺

候処侍従之格二可相心得旨被仰聞其通相濟候、披露松平玄

蕃頭

披露仕様并心得之部

一御三家之家老御附之分者御主人之御名申儀無御座候、但あな

た尔て家老尔成候茂御主人之御名ハ不申候、惣体家老城代伝

り家老之外者継目之御礼ハ無之、其外之家来使者などハ御主

人之御名申候

一寅三月廿八日尾張中納言殿家老竹腰民部継目之御礼申上候、

依之例書

中山備前守弟中山主殿初而御目見、水戸中納言殿家来中山

主殿と披露、右披露青山播磨守当番本多弾正御用番土屋相

模守殿江相伺披露

如此書付候得共松平備前申候ハ御三家ケ様之家老筋之者御

主人之名を申候例覚不申候段申候得共、本多弾正被申候者

其節当中山備前守事ハ弟養子にて候故窺御主人之名を申候

由被申候、竹腰民部は養子継目之御礼二付中山主殿とハ誤

違候、前々方御主人之苗字名不申候付伺二不及竹腰民部と

計松備前致披露候、尤其身熨斗目長袴着いたし松備前も進

物番も熨斗目長袴着被致候事

一 弟養子二而茂御三家之家老筋の仁ハ御主人之苗字名不申候、
 国方の使者勿論其外ハ此以前方御主人之名申候事

一 御勝手より御次一同参上中山半右衛門参上、松平帯刀遠国寺
 社御年頭右披露之儀忝人二而可致哉兩人二而可致哉と何茂相
 談いたし候処ニ去年ハ致如何候哉扣見申候処、武田織部新知
 之御礼右京披露いたし遠国寺社之披露者伊賀右兩人ニて相勤
 候得共何茂忝人二而遠国寺社共致披露候、其通可然与相談相
 究飛驒忝人二而致披露候

披露之儀忝人二而茂忝人二而茂不苦候、先者ケ様ニ成ハ忝
 人二而仕候

元禄四年二月十三日

一 紀伊大納言殿城代並之
大寄合坂部惣大夫儀家老共之方江附可申候哉番
 頭共之方付可申哉と豊後守殿江飛驒彈正相伺申候処、豊後守
 殿被仰聞候者家老之方江付出し可申由、依之其通ニ罷出御目
 見仕候、重而ケ様之儀候ハ、其時々ニ心を付可申候事

同年同月廿八日

一 松平又左衛門初而御目見御白書院双方熨斗目松平彈正
長袴正光之御

太刀銀三百枚時服二十台忝ツ御敷居之内江入、豊後守殿江出
 雲伺申候者又左衛門様之例無御座候いか、可仕候哉と申候処、
 豊後守殿被仰聞候者侍従之通可仕候由被仰聞候付其通り罷成
 候

右同日

一 松平加賀守 ふくさ半袴
 加賀守御礼豊後守披露之其以後御前江父子一所ニ罷出候、御
 敷居之内江入御言葉在之退去、父子共ニ脇指小サ刀さす

正徳四甲年正月十五日

一 宗对馬守国許江之御暇拜領物之御礼今日被申上御道具御馬被
 下候、但御道具帶罷出御礼申上ニ不及一度ニ而御礼共相済候、
 对馬守脇差を置候而可罷出哉其段備前守江被尋候付御道具拜
 領可仕哉と脇差を置罷出候儀いか、に候間、先帶罷出御礼
 申上少ひらき候様ニ被致候ハ、老中会釈可有之候其時脇差ヲ
 置被罷出可然与申談候内ニ、御礼前河内守殿方大目付横田備
 中守を以致帶劍罷出直ニ御鋪居際迄寄可申旨被仰聞候付脇差
 を帶罷出直ニ内ニ而頂戴

藤堂和泉守小笠原右近將監

松平中務大輔ナト右同断頂戴

是ハ有章院様御時代也、唯今ハ前々之通也

同年同月廿八日

一昨廿七日備前守当番ニ而河内守殿御渡候書付忝通ニハ、喜連川右兵衛督右先規之通向後下司披露可有之となり今一通二者喜連川右兵衛督御太刀置所御白書院御下段御敷居之内下方三疊目其身御礼同所一疊目

右二付嶋田佐渡守備前守江申聞候者、喜連川右兵衛下司附候得者在所ニ而ハ兵衛督と唱申候由ニ付此方ニて者右兵衛と披露いたし候旨申候得者唯今迄下司無之候間左様可有之候、但馬守殿江茂候得者兵衛と計ハ被申間敷と被仰候、下司付候得者在所ニ而兵衛督と申旨ニ付而右之趣を以今日之当番吉岐守被申談備前守兩人ニ而河内殿被相伺候処、自是可被仰旨ニ而早速罷出兵衛督と申候ハ、其通ニ致披露候様
二と被仰聞喜連川兵衛督と右京亮致披露候
一正徳四年四月十一日松平大炊頭松平安芸守有馬玄蕃頭松平土

佐守右四人参府之御礼御黒書院ニおゐて四人一同ニ罷出御下

段敷居之内ニ而御礼、此時御下段右之方ニ大和守但馬守河内

守豊後守列座大和守御取合申上候、御奏者番も吉岐対馬宮内

右京四人罷出早速御下段御左之方江ひらき御老中之向尔扣罷

在右披露之いたし様前とハ違右之通罷成候、昨日之当番土井

山城守江大和殿被仰渡右之通

△附札 是ハ有章院様御時代也、只今ハ大形忝人ツ、出候也

正徳四年四月十五日

一向後諸大夫ニ而茂城主御礼之時御太刀少シ上ケ候而置可申候、左様ニ無之候得者夫江と上意在之時御太刀つかへ寄がたく候間此已後者心得可致候、但馬守殿ニ茂可被仰聞候得共先被仰聞候間何茂可申合旨御用番大和殿同役中江被仰聞候、依之下より二疊目之上尔置可申与申合候

△附札 是者有章院様御時代也、只今ハ前々之通也

同年五月朔日

一松平肥前守名代黒田伊勢守罷出黒田官兵衛御目見之御礼御太刀ニ而仕候、長袴着被出有之節松平備前守長袴ニ而御礼申上

候儀候哉いかゝと被尋候付長袴二而可有之と存候、乍然頃日ハ半袴之儀も在之候間先長袴之俣可被有之候、同役共大目付衆江茂申談追而可申被致挨拶同役衆并大目付仙石丹波守江右之趣申談候得者、兎角近例も候之間伺之上可然与何茂申合御用番井上河内守殿江ケ様成悴御目見仕候ニ父御太刀上ケ候儀前々方終ニ覺不申候、綿歟時服之類ニ而相濟候ニ付半襠ニ而御礼申上候、御太刀上ケ候時者いつとても双方長袴ニ而候得共去頃松平民部大輔養子之御礼申上候節御手前様御差図にて御太刀上り候へ共熨斗目半袴ニ而御礼致させ候様ニと被仰聞其通り相濟申候、今日茂右之通之訳ニ御座候、長袴之俣出し可申哉半袴ニ可致哉と右京老岐山城相伺候処長袴ニ而可有之与思召候得共、御同役中江被仰談追而可被仰聞由丹て其已後被仰聞候者前方松平民部大輔茂熨斗目半襠ニ而御礼申上候、今日者同様之名代之儀ニ候間猶以熨斗目半襠丹て御礼致させ候様ニて被仰候、左候て披露も長袴ニ而者いかゝ候之間熨斗目半襠ニ而可相勤旨被仰聞宮内肝煎番ニて右之段同役中江申談大目付衆江茂申黒田伊勢守江相通し半襠ニ着替させ候事

一御礼衆大勢一同罷出候時者御太刀をひらき候而致披露候へ共小勢之時者ひらき候ハ、目立可申候いかゝ可仕哉と相伺可然与同役衆申合御用番河内守殿江当番対馬窺候処御相談可被成と被仰、其以後被仰聞候者尤ニ思召候間小勢之時者ひらき候尔不及候大勢之時披可致披露之旨被仰聞候、依之今日者御太刀持出置候者其俣罷在致披露候事

△附札

有章院様御時代也、只今ハひらき候事ハ無御座候、前々之通なり

一正徳四年二月十五日大御番組頭八人御代替以後名披露ニ而無之候処去已九月朔日大坂帰之節御用番井上河内守殿御差図ニ而名披露ニ成候而高木主水勤之、右ニ付今日之当番森川出羽も組頭八人名披露ニ成候事

△附札

前々より名披露也、有章院様御時代二者名を不申候儀も有之候、只今ハ名披露也

同五月十二日

一高家衆京都帰御礼例表向方罷出候由但馬守殿江大澤越中守今日被伺候処御勝手より可被罷出旨被仰候由ニ而御勝手より罷

出御礼披露三浦壱岐守双方半袴

正徳四年六月十三日

一御敷寄屋方頭披露ハいつも若年寄衆被致披露候処今日者列茂有之候之間奏者方ニ而可致披露旨昨日之当番壱岐守江但馬守殿被仰聞候ニ付、今日小普請方太田伊兵衛鳥居金左衛門紅葉山御用相勤候ニ付御礼引つゝ、き尔宇治帰村田恵斎と民部披露仕候

同年十一月十五日御納戸構後ふくさ半袴伊豆

一大久保八大夫御代官共、右八大夫八大坂御藏奉行御代官十人參上、右披露之儀此例書を以同役中申談候処東叡山御法事御用相勤候小普請方御賄頭御右筆御勘定組頭御代官添奉行等品々大勢ニ而候故今日例之通ニ披露ハ無之御法事御用相勤候者共与大和守言上大久保八大夫八名を申御代官共と致披露可然与申合右之通ニ相濟候

右例書正徳三巳三月朔日御納戸構

是八大久保八大夫御代官共と披露之儀ニ付以此例書同役相談ニ而右之通披露相濟候

御暇

二条御藏奉行 奈佐諸大夫

參上

駿府御代官 鈴木小右衛門

二条御藏奉行御代官と右京披露

一正徳四年八月十一日今日寺社奉行衆御用在之対馬守出羽守不

被出候、山城守者寺社之御用ニ而被出候披露も可相勤候哉と大和殿江被伺候得者、御用ニ而被出候事候間被致披露候而茂能可有之由被仰候旨ニ而被致披露候

元禄十五年二月廿八日官位之御礼当番松平彈正双方熨斗目長袴

一本庄安芸守御馬代御敷居之外侍従之御礼、御太刀馬代外二献

上物無之時ハ御馬代御敷居之外二置之、外二献上物在之時ハ

御馬代御敷居之内江入

同年三月朔日

一当番月次之出仕者無之候得共麻上下ニ而致登城宣通迄罷在大目付申合裏附上下着替申候

同年同月十一日当番松平彈正双方のしめ長袴

一松平安芸守献上銀三百枚時服二十五台共ニ御前江出候御礼申

上銀台壱ツ御敷居之内江入殘四台ハ御敷居之外置之御太刀御

敷居之内壱疊目之下ニ置之、今日安芸守進上之台長過候而御

縁之外江余り申候由進物番衆被申候、就夫右京大和殿江申達

佐渡守殿江相伺候処外江進物番衆罷出候程之位者御目二立可申候間御納戸ニ而台為替可申候、御納戸ルて台無之候ハ、外江出候と備候不苦候之間其俣出シ候様ニて被仰候二付御納戸致吟味候へ共台無之候、其内何茂同役共申候者引而ハ格別此度者少シ長ク候而も可罷成と申達其通二成

同月廿二日御黒書院当番出雲双方のしめ長袴

一松平伊予守銀三百枚時服二十五台内銀台一御敷居之内江入残り銀台式ツ時服台二御敷居之外二置台也

今日同役衆被申候者伊予守献上五台之内三台御目通江出候様ニ覺被申候由二台者西湖之間江入申候旨何茂被申候、松彈正申候者進物西湖之間江不入不殘御目通江出申候由申候得共仲ケ間衆同心丹無之候而出雲右京越中守殿迄被申候之処二越中殿佐渡守殿江窺被申候得者其段者成程去々年極り五台ながら御目通り江出候筈二候之間今日も去々年之通二被致可然由二付五台共二御目通江出重而も如斯心得候得者御申聞候

同年同月廿八日御白書院当番飛驒双方のしめ長袴

一松平薩摩守 銀三百枚 時服二十 七台 銀台五
時服二
御目通江五台出ス

殘銀台式ツハ出し不申候

右七台御黒書院二候得共西湖之間江入レ置キ台丹成候様者覺申候得共御白書院御礼ケ様之格前々何茂覺不申候付播磨守彈正致相談佐渡守殿江相伺候者、御白書院之儀ケ様之格覺不申候前々被仰聞候者台いか程有之候共皆御前江出し候様ニ承候付相伺候与申候得者尤二思召候間弥五台出候様と御差図二付右之通相濟候

但只今ハ台数多候而も大方五台御前江出申候、置台と申儀者御三家薩摩守陸奥守様者御礼之訳ニ而置台二罷成候、其外当御代者置台と申事ハ覺不申候

同年五月十二日御黒書院当番右京双方長袴

一松平肥後守銀百枚蠟燭十箱三台右銀台壹ツ西湖之間江入蠟燭五百挺入二台御敷居之外二置台也

但當御代ハケ様成ハ置台二成候事無之大方持出しに罷成候

元禄十五年六月九日御黒書院当番壱岐長袴

一松平又左衛門長袴元服依被仰付於御縁頼御目見奏者番三浦壱

岐守披露上意有之、此時御諱元字拝領等終而御次江退出之時

正四位下尔可叙由上意之趣相模守演説之老中列座其後御礼有

之松平若狭守御太刀信房と披露時服二十黄金五十枚右之通獻

上之御縁頼御礼奏者番三浦壱岐守長袴披露官位御礼申上旨相

模守言上御次之間江退座進物引之

同年六月廿八日

一紀伊大納言殿薙髮对山殿使者山下藤右衛門御披露之節者未相

知候間先紀伊对山殿使者山下藤右衛門と相模守殿御差図二而

候処、同年七月廿八日今日徳川对山殿使者と御書付申出候付

当番日向守常阿弥を以豊後守殿江相伺候処向後徳川对山殿と

披露可仕旨被仰越候事

同年七月十一日当番伊予双方半袴

一松平加賀守家来前田美作前田備前兩人共二御前江、脇差取候而出候

兩人共二前々方於御次御老中列座御暇被下拝領物被仰付候旨

被仰渡候、已後御前江罷出候処今日ハ被仰渡無之以前兩人共

二御前江可罷出与いたし候披露之者茂可罷出といたし候処を

豊後守殿御留候而御暇拝領物被仰付候、已後御前江罷出候重

而ハ被仰渡無之以前罷出候様二心を付可申事

一同日初而御目見大勢二候間名を書太刀二張札いたし可然与御

差図二而ハ無之由豊後守殿飛驒守ヲ以同役江御内意被仰聞候、

然候尔張札今日ハ目錄之名を表かへし可然と同役被申候而す

て尔及御披露候処但馬守殿御覧折紙御取常のことく折直シ御

渡し被成候、重而ハケ様二御礼衆大勢之節ハ名を書太刀二張

札いたし可然与存候其節可申合事

昔より太刀尔張札と申事無之候得共、誰初められ候哉頃日

ハ張候時も有之

同年八月廿八日

一関久右衛門事大黒長左衛門跡役尔て今日初而御礼申上候披露

之事戸川備前守丹後守殿江相伺候処吟阿弥を以被仰聞候

者名苗字斗可致披露旨被仰候、依之名苗字伊賀守披露候申候

閏八月十五日

一三州法蔵寺八幡神官銀座年寄

法藏寺ハ入院之御礼八幡神官ハ参上銀座年寄共参上銀座年寄深江庄左衛門名ハ不申候、右之通致披露候

同年九月十五日

一 細川越中守 悴細川内記 御目見之御礼

縮緬百卷 二台

本多彈正
双方のしめ半袴

越中守進物置所之儀進物番衆被申候者前方松平出雲守進物台置所之儀朽木伊予守江相尋候処、二台有之候ハ、一台者御敷居之外一台者御敷居之内二置候得与御申候、今日越中守進物台如何可致候哉と被申聞候、同役中致相談候処馬代茂無之台数も少く在之候間二台共二御鬨之外二置可然与何茂申談之通二罷成候、但台数多候時者御敷居之内江入可申候事

同年九月十五日

一 玉虫助十郎伴善大夫伴善九郎 双方半袴 飛驒

大坂御金奉行御暇二条御歳奉行参上初而善大夫惣領伴彦九郎ケ様二御役儀替御暇与参上と初而之儀と銘々名苗字申候

同十月廿八日湯治帰

一 大久保市十郎 ふくさ

松彈正 のしめ 彈正披露御前江見不申候付長襦のま披露

市十郎熨斗目二而罷出候大目付仙石伯耆守被申候者市十郎予熨斗目二而出候ふくさに致可然候哉と被申候、松彈正成程ふくさ尔而可有御座候乍然表向之儀ハ違も可有御座候同役衆相談可致と申同役衆江申談候処伊賀守ふくさ小袖二而可有かと被申睨与挨拶無御座候付、松彈正兎角ふくさ可然与其段伯耆守江申候而ふくさ二而御礼申上候

右同日御納戸構

一 御代官共

本彈正

御代官諸星内藏助杉山久助依田五兵衛高谷右兵衛平岡次郎右衛門平岡彦兵衛ケ様二御役儀罷成ハ名苗字ハ不申候、右之通致披露候

右同日御黒書院御勝手

一 引渡罷越候御代官共

ふくさ半袴 備前

兩宮勘兵衛比企長左衛門ケ様御役一樣二而御座候共引渡罷越さすなと、候得者ケ様二致披露、又両人之名苗字申事茂

有之

同年十一月朔日

一古筆了音觀世大夫

ふくさ半袴
本弾正

古筆見了音尔て御座候へ共見と申儀聞尔て御座候故古筆了音と致披露候

同年同月十五日御白書院

一松平肥前守

双方のしめ半袴
右京

綿三百把銀三百枚台六ツ之内御前江五台出ス、例より台大きく候故御闕江懸置セ候、綿台残今日者窺不申候而右之通出候、右者辰十一月十五日肥前守参勤御礼之例也

右同日

一勝仙院

ふくさ半袴
松弾正

使僧二而候得共勝仙院と致披露来候

同年同月

一水戸中将殿 御黒書院 任官御礼

引太刀
飛驒 のしめ長袴

時服六金馬代真太刀黄金御敷居之内二疊目之中程少置之時服御敷居之外尅畳目置之、右京相談相伺可然哉と申候処夫二及不申候由被申候付有之通置之

同年十二月十五日御納戸構

一見分婦之者共

双方ふくさ小袖半袴
松弾正

此内二新番大番御代官茂御座候、仲ケ間相談候而見分婦之者共と致披露候、名苗字茂申時茂御座候

同年同月廿八日御勝手方

一中嶋与五郎ふくさ半袴

のしめ長袴
松弾正

中嶋与五郎例半袴尔て披露申候得共今日ハ酒井日向守を長袴尔て披露申候、御前江見不申候故長袴之值二而披露候

右同日

一連歌師銀座箔座之者共

右京のしめ半袴

いつとハ連歌師共銀座箔座之者共ト披露申候へとも右之通右京披露候

正徳二年辰五月廿八日

一下司少輔披露之儀只今迄少輔と少と両様仲ケ間唱来候、今日

松平对馬守松平兵部少輔披露当り少付豊後守殿江相伺申候処、御仲間御相談之上二而向後少と致披露候様二と被仰聞候而相究り申候

右者去ル元禄十五年之日記尔四月朔日只今迄ハ式部少輔ヲ式部少ト計披露申候、今日豊後守殿佐渡守殿被仰候者少ト計ニ而者悪敷候間向後少輔と披露候様ニと飛驒守江被仰聞候、依之今日少輔と披露申候由

但少ト申儀もすこしの内御座候所只今ハ惣体少輔ト致披露候

一名代ニ而御礼申上時ハ本人之名披露仕候、仮令ハ父御鷹之鳥拝領其節煩なと尔て世倅名代として罷出候時ハ父之名申候、或娘之婚礼相济候而其父ハ在所ニ在之時分者祖父又ハ兄弟なと為名代罷出候時ハ父之名を披露仕候事

巳三月四日

一御礼前相模守殿被仰候者御奏者番四人ニ而済可申哉と被仰候付成程成可申旨申上候然処寄合日ニ候得共寺社方之衆一人被出候而可然由但馬守殿被仰候由ニ而播磨守被罷出御披露も被相勤候、今日者雨天ニ而御勝手へ廻り申候御縁ぬれ何れも被廻不申候又大廻し致候而間ニ合不申候故右京彈正致相談相模守殿御出かけニ右京相模守殿江相窺申候者御縁ぬれ御勝手江

まハられ不申候、大廻り致候而ハ間尔合不申候間何とそ何も様御通り被成候かこひ之門内御縁を廻り申度奉存候、左様ニ仕候へ者殊之外致能御座候と申上候得者相模守殿被仰候者内御縁廻り可被申候不苦候由被仰候故何茂右之縁廻り申候、只今迄ハ終右之御縁廻り申候儀者無御座候、今日ハ廻り初二而御座候重而者ケ様ニ同役小勢ニ而御礼衆多く雨天之時ハ又相廻り可致申候、天氣能日歟又ハ雨降尔ても御礼衆之披露大廻しいたし候而も間ニ合申候程に候ハ、右之内縁廻り申儀者不入事と覚候而重而心ヲ付可申事

巳年六月廿八日

一論所見分帰之者共飛驒守申候者論所と申事無用之由前方若年寄衆被申聞候ニ付見分帰之者と披露いたし候由

同年七月十二日

伏見奉行
一建部内匠頭長袴

長袴
彈正

内匠頭御奏者方江申候者御老中江相伺候処長袴着仕候様と就御差図長袴着致候由被申聞候、依之披露人茂進物番衆茂長袴着之遠国之御役人者半袴ニ而御座候、太刀在之候而茂

半袴二而候、内匠頭八万石故二而可有御座候哉重ねて氣を付可申候

同年八月廿八日

一松平薩摩守使者嶋津主水松平土佐守使者山内監物右自分之御礼ケ様成使者ハ、間ニ誰茂無之自分之御礼申上候時ハ主人之名計ニ誰家来名苗字申候、間ニ壹人ニ而も何そ有之時ハ主人之名苗字家来之名苗字可申筈二候、然共薩摩守土佐守使者又同人兩人之家来はさまり出候得共主人の名苗字尔及申間敷と同役申合、主人之名計尔誰家来誰と家来ノ名苗字申候

一尾張殿家来 渡辺飛驒守のしめ

半袴

右京ふくさ

半袴

御勝手ニ而御暇被下旨拝領物御老中被仰渡以後御前江罷出 拝領物ハ於躑躅之間頂戴之、前方成瀬小吉初而御暇之節ハ初而故主人之名申候、今度も主人之名可申哉と何茂相談候 処今度飛驒守諸大夫二成候而之儀ニ付前方ハ度々御暇被下 諸大夫尔罷成ニ而初而と申計ニ候を主人之名申候ニハ及申 間敷と何茂相談申候、御老中江相伺可申哉と当番日向守被 申候へ共夫ニハ及申間敷と右京彈正と計披露相濟候

同年十月十五日

一松平市三郎初而御目見

出雲のしめ
長袴

松平日向守

双方ふくさ
半襦

彈正

世倅御目見之御礼ニ只今迄五万石以上ハ親罷出御礼申上候、 五万石以下ハ親之御礼無御座候得共今日日向守世倅之御礼 申上候、向後之格ニ成候旨当番飛驒守江丹後守殿御内意被 仰聞候由

同年十一月廿八日

一御代官共参上

窪田長五郎
内山七兵衛

井口治右衛門

高田赤穂婦御代官四人役所ニ而参上、御代官三人御披露ハ 兩人ニ而同様ニ御代官共ノとは被申間敷候ニ付同役相談 二而彈正御披露ハ高田赤穂婦之者共と申候、其次右京大夫 ハ御代官共と御披露申候

正徳四甲午年八月十一日

一今日寺社奉行衆御用有之対馬守出羽守ハ不罷出候山城守ハ寺 社之御用ニ而罷出候、披露も可相勤候哉与大和守殿江被伺候 得者御用ニ被出候事候間被披露候而茂能可有之由被仰候旨

二而被致披露候

享保二丁酉年正月十五日

一喜連川梅千代

双方のしめ長袴

主水

御太刀置所伺之上御闕之内下右上江三疊目中程二置之其身

ハ御敷居之内一疊目二而御礼先格之通二致候様山城守当番

伊予守へ被仰聞候

同年二月十五日

一 国廻り二罷越候御番衆子共初而御目見ハ御立座二而茂名披露

二 而候得共大勢二而候、左候而も名披露二而可有之物二而大

勢之時二条大坂駿府在番二参候子共者御納戸構二而一同二御

目見有之候故御番衆世悴共と致披露候得とも、か様二表立候

而之儀ハ名披露二而候半か然共御番衆世悴共と披露可申候哉

と河内守殿江伺候而、其通致披露候様二与被仰聞右之通二披

露仕候

同年四月十三日松平陸奥守御礼

一 進物番衆申候者中将之台銀二台御敷居之内江入置綿一台外二

置候与申候由、松備前申候者中将台茂銀台壹内江入今一ツハ

御敷居江懸て置綿台壹ツハ御敷居之外二置候与申達候得共、

進物番ハ右之通覚候由被申候而銀台式ツ内江入置綿壹台ハ外

二置候、伊予守も備前守同意二被申候、依之大和守殿江当番因

幡并備前申達候処大和殿尔も備前守覚候通二御覚候間其通為

置候様与被仰聞候

参勤

一松平陸奥守

御馬二疋

双方のしめ長袴

因幡

御太刀目録下より三疊目之上置之

銀五百枚五台綿三百把都合台数八ツ之内銀台一ツ御敷居之

内入置銀台壹ツ御敷居江懸候而置綿台一ツ御敷居之外際二

居残候、銀台三ツ綿台二ツハ西湖之間江入置御襖障子明置

右不残出御前より置台也、陸奥守御礼相济候与大久保佐渡

守西湖之間御襖障子開之御目通之台三ツ共二進物番引之

同年七月朔日

一 国友兵四郎助大夫兵三郎

半袴 近江

鉄炮張例之通名披露也

鉄炮壹挺宛差上之御敷居之上二置之落縁二而御礼申上候、

御鉄炮火挾を上二台尻之方を御前之方にして筒先を下の方
になし少筋違御敷居之上二置候、近江守披露二付近江守被
申候者御敷居之上二置候茂いかゝに候御疊の上二置可然哉
与被申候、備前申候者其身落縁二罷在候得者鉄炮も落縁二
置可申儀二候得共見江不申候付御敷居之上二置候訳かと申
候、対馬主水茂備前同前二被申候、御目付仙波七郎左衛門被
参是又重而例二茂可罷成候由被申候、前々之通御敷居之上
二置候而相濟候

同日

一村上飯山御用仕廻ました御代官共

主水当り
右京

右披露之儀豊後守殿江宮内伺候処前方いかゝ披露致候哉与
御尋二付、ケ様成ハ越後信濃引渡帰之御代官共与致披露候
段申候得者、夫者悪敷候村上飯山御用仕廻候御代官共と成
とも引渡帰御代官共ト成とも可申旨被仰候二付、右京其外
同役申談村上飯山御用仕廻ました御代官共ト披露可然旨同
役共申談候付其通右京致披露候
一披露ハ何二而茂当番第一重き事を相勉次第く、尔輕キ事を其

先々之番を勤之候、昨日当番ハ大形ハ肝煎相勤也、乍去御目見
衆多勢之時ハ第一輕キ披露ヲ勤候也

一披露之儀文字次第尔誂候而者相違有之故寺社方ハ寺社奉行被
承合候、国持家来名字殊奥州薩摩杯之家中者苗字ニハ難字在
之二付留守居か或御目見仕候使者ニ承合たるか能也

一御三家并御嫡方年頭御所労或御差合等ニ而御出仕無之重而御
礼之節者老中長袴ニ而披露、引太刀奏者番茂長袴ニ而勤之

一大坂二条駿府在番上り下り御目見在之時御番衆御目見者山吹
之間ニ而入御之節御通かけ奏者番披露之、時ニより山吹之間
か羽目之間歟御白書院御納戸構歟右三ヶ所之内ニ而御目見、
羽目之間披露之時ハはめより前横疊ニ疊目之内縁類西湖之間
之方よりハ吉間半之内縁際ニ罷在候、山吹之間披露之時者山
吹之間之内御襖際羽目之間堺目御襖に付罷在、御白書院御納
戸構披露之時者御障子に付一間半程下り在之、御番衆披露之
跡丹て大儀与上意在之時ニより大儀其上ニ而念入候様ニと上
意之時も在之、其跡尔て御老中難有旨御取合被申上候已後御
番衆悴共と御言葉ニあたり不申候様ニ披露

一 大坂二条駿府在番婦又ハ婚禮之御礼披露ハ半袴也、右之席二

御勘定方或御馬方御鷹方或医師方御右筆之面々子共御通かけの御目見申上事在之、其節ハ今度被召出候悴共と披露ルて首尾二より其仁之名を披露之事も有之

一 奏者番小勢之時表向之御礼衆尔半袴着用数多在之候へ者御勝手方おたとひ長袴丹て御目見之衆候而も半袴ルて披露候、又ハ表向之衆長袴着数多在之節者御勝手よりの御目見半袴ルて茂太刀折紙鳥目進上無之時之御目見之衆ハ披露を勤ム

但小勢之時長袴ルても半袴之事半袴二而も長袴之事御老中江御人たり不申付右之通と伺候而致披露候、進物番衆も不足二て着替候間茂無之時ハ伺候而御差図次第いたし候事

御勝手江長袴ルて表向より被廻候時ハ何とそ長袴之着廻り致披露候、不被廻時ハ相同半袴ルても長袴の致披露ハ鳥目献上之衆御太刀無之衆尔独礼と申儀者無御座候、皆々様成者一同之御礼御通懸ケ二而御座候

一 又者御礼之時ハ其上長袴着用二而茂披露之奏者番者半袴着用、但又者二て茂御三家之家老又者由緒有之仁者披露も長袴也、

進物番准之

一 又者披露二ハ主人之名苗字を初め尔申扱其者之名を披露ルて縦ハ誰家来何之某と申候也、継目家督被仰付面々家来多勢御目見申上時ハ初メ壺人者主人之名字共二申忒人めり主人之名計其身之名苗字を申也、御三家の家来のうち二而者竹腰成瀬安藤水野中山等などは御直参のことく其身の名計申候也、其外二而も家老職之者ハ准之、但參勤御暇之節ハ用人已下也。御前江出者ハ主人之名者不申其身之名計披露

一 七夕之御祝儀上り候節於柳之間是を致披露かた端午重陽歳暮御祝儀上候節之格ルて七夕と申替候迄之事、出座之御老中(紙)辰子肩衣二而候得共此方も辰子致着披露候事

但七夕惣様目録ハ台之上二載有之、口上二而致披露候一御三家御家来老城代御附人披露之分ハ長袴着いたし候、披露も誰家来与不申御目見之者名計申候事

一 右之御方御附人之悴之分ハ家老職勤不申候とも長袴二而披露御主人之御名も不申候事、但元禄八年十月朔日成瀬小吉御暇之節ハ始而之儀二而も候間御主人之御名も申候様二と加賀守殿御差図被成候事

但大形ハ御主人之名者不申候

一 拝領物之節者家老城代御附人之悴もり迄ハ置候而立申候、其外之者共ハ取て立候事、但先年者如右候処近年ハ伝尔者取て渡申候家老城代御附人悴迄置候而立申候、席ハ家老城代等使者ニ罷越候節者芙蓉之間縁類也、其外ハ躑躅之間也、右之輩茂供ニ而罷越候節御暇尔ハ躑躅間也

△附札 其外之者共ハ取て渡シ候ニ付持立申也

但広蓋口頂戴之分家老城代伝家老紀伊殿ニ而者城代並之大寄合之分ハ広蓋口頂戴之、近年伝ニ取て渡候と御座候、いつの時分ニ而御座候哉左様之事も可有之候得共夫ハ渡し違と存候、併伝と計ニ而候得者取候而渡候へとも伝と計之者ハ出不申候故伝家老尔て御座候、是ハ広蓋口頂戴尔て御座候
△附札 伝と計のハ取て渡し候、伝家老と在之時ハ置広蓋也
一 長上下着披露之分

四品以上官位之御礼、国持并万石以上交代、寄合并御三家家老等参府之御礼、万石已上家督分知之御礼、万石以下尔て茂右之類独礼之分、御加増城地拝領之御礼、万石以上子共始

而之御目見、万石以下ニ而茂独礼之分

一半袴披露之分

婚姻之御礼、遠国役人参府^{但万石以上其節可伺}并在番加番婦之御目見、半年代参府、湯治婦病後之御礼、上使御目付婦其外御用被仰付遠国方婦参之御目見、陪臣之分独礼ニ而茂御三家之御家来ニ而茂家老城代之外ハ陪臣ニ准ス、御暇之分不残御直参ニ而も御立座一同之御目見、寺社并町人惣而御立座之分

一 御礼日惣披露表向四品以上御譜代衆共ニ不残、但松平越前守ハ法印之医師御礼之次ニ罷出右ハ名計下司無シニ披露

但陸奥守撰津守紀伊守ハ下司申候

一 五節句者惣披露無之、但松平越前守ハ御白書院ニおゐて松平越前守と致披露候
△

但五節句ハ惣披露無之候得共当番惣披露之席被罷出相濟候迄罷在候

△附札

五節句ハ越前守披露御敷居之内江ハ不入常之通御縁類御障子際ニ而御礼申上披露も常之通也

一 御暇之節ハ惣而誰人ニ而茂下司不申候

但陸奥守撰津守紀伊守八下司申候

正月朔日

一前々ハ連歌師共吉川推足(△△)と披露仕候得共唯今ハ渋川右衛門吉

一後藤本阿弥狩野呉服飾師幸阿弥職人共御年頭耆人 △

川源十郎竹山三七郎連歌師共と披露仕候

正月三日

元和二戌年

一上京下京大坂堺奈良伏見過書銀座朱座五ヶ所割符之者共御年

一御三家使者并紫衣之僧又ハ僧正抔披露自今以後老中之下座二

頭耆人

而奏者番披露仕候事

正月三日

但右之様成事可有之候得共只今ハ常之通致披露候

一当所町年寄惣町中御年頭耆人

同年四月

大広間御下段 正月六日

一御馬献上之時自今以後毛付不及披露候、御馬員数計披露可仕

一伊勢内宮外宮山崎諸国之神主本山先達共御年頭耆人

旨

御白書院御次御疊縁 正月六日

一御代官八人御目見在之二付披露之儀御代官卜成とも御代官と

一春木大夫山本大夫徳川萬徳寺正田隼人御年頭耆人

成とも披露可仕旨元禄二巳十一月十五日阿部豊後守殿加藤佐

渡守江被申聞候

△附札
長披露之分計此所江書出し候、其外披露委細之儀者
すへ二有之

但御代官一人二而候得者苗字名申候、二人方ハ御代官共と

御白書院 二月朔日

致披露候御勘定方茂右同断

一上野惣中遠国天台宗紅葉山永徳永閑東叡山社家共御年頭耆人

御白書院御次 正月朔日

同 二月朔日

一人見又兵衛七郎右衛門帶刀久志本式部民部内蔵元御年頭耆人

一日光御門跡家来共山口図書田村権右衛門楽人共御年頭耆人△

同 二月

一富士村之辻之坊長崎町年寄小法師石見

前々八遠国寺社富士村山辻之坊与披露之事有之

△附札

御門跡家来ハ御願ニ而享保三戌四月九日方名披露ニ
罷成候

大広間 三月

一撰家衆青蓮院御門跡使者伝奏家老楽人惣代御冠師御烏帽子師

御末広師壺人

△附札

披露席大広間与有之ハ御白書院落縁也

御白書院 入御之節御通掛三月十五日

一幸若弥次郎作之丞治助伊之助壺人

御白書院御次一同 四月朔日

一因碩本因坊宗印其外碁将棋之者共壺人

古例

長崎本連寺碁将棋之者共銀座年寄幸若弥次郎伊右衛門壺人

御白書院御次一同 九月

一当山二宿八幡神官撰州富田町人清水市郎右衛門京都塗師源助

壺人

古例

当山二宿八幡神官遠国寺社奥州柳津ヤナツ円藏寺富士村上辻之坊

壺人

一伊藤印寿大橋宗珉京下加茂社家惣代北野祠官平野社家惣代駿

府町惣代壺人

右之外大御番組頭在番上り下り名披露

一遠国寺社者其所之名を寺社之披露之節何方之何寺と申候、縦

者南都西大寺金剛院与披露

一江戸寺社者其所を不申只其社其寺号計申候、縦ハ神田明神神

主芝崎宮内を明神神主与披露申品川東海寺を東海寺与披露申

神田共品川共不申候

一二月晦日迄者御年頭と披露申候

享保四亥正月十五日

一松前志摩守 松前伝吉 志摩守養子

右者松前父子二候得共同伝吉とハ不申候

一檢校披露京都ハ何職檢校江戸ハ何檢校 △

△附札

京都ハ池川職檢校卜披露
江戸ハ嶋浦惣檢校卜披露

享保二丁酉年五月朔日

一藤堂主水

双方のしめ裕
半袴

備前

城主二而無之故於御勝手御暇拝領物御老中被仰渡以後御前
江出候筈二而可有之候、蜂須賀隱岐淺野土佐守格二而可有
之与宮内伺候、外之御老中与右之格二御心得候処山城守殿
ハ御前二而御暇与御心得候哉早々出候様二と被仰罷出候、
於御前御暇被下城主格二相濟候、其已後奥方御礼書取二参
其後何之御沙汰も無之候

同年七月朔日

一日下部佐十郎 長崎奉行丹波守

御勝手江山城殿御廻り於御勝手役所江御暇拝領物被仰付候
旨被仰渡候、以後御前江罷出候御礼前諸大夫被仰付候得共
元之名可申旨被仰聞其通致披露候、拝領物者御礼過於芙蓉
之間御老中列座頂戴之

宝永七寅年正月廿八日

一遠州見付上村清兵衛先格遠州見付上村清兵衛与披露之所申頃
遠州見付清兵衛与披露有之候、大久保加賀守殿御礼書御持出
候処、当番之奏者番三浦壱岐守未登城不仕故松平備前守罷出
候処御礼書御渡遠州見付上村清兵衛儀向後御目見之節遠州見
付上村清兵衛与披露可仕旨備前守江被仰渡、則今日鳥居伊賀
守遠州見付上村清兵衛与披露有之候

享保元年八月九日

入御之節御通りかけ山吹之間

当番
松平伊豆守

右次目隱居初而御目見之者共与松平伊豆殿披露

一次目隱居初而御目見之者右之通可致披露哉与大和殿江伊豆

殿被同候処其通二致披露候様二と被仰聞右之通相濟候

同年十一月十一日

入御之節御通りかけ山吹之間

当番
高木主水正

繼目

家督

一同之御礼
主水

隱居

右継目家督隱居之者共与高木主水殿披露

同六丑年三月廿一日

当番 高木主水正

入御之節御通りかけ山吹之間

継目

家督

隱居

初而

右次目家督隱居初而御目見之者共与披露

同十巳年八月十五日

入御之節御通りかけ山吹之間

家督隱居

分知

初而

右家督隱居分知初而御目見之者共与披露

宝曆九卯年十月廿一日

当番 阿部飛驒守

入御之節御通りかけ山吹之間

家督

分知

隱居

初而 一同之御目見

一同之御礼

下札

隱居不罷出候
付家督分知初
而御目見之者
共与披露相濟
申候

一月次四品以上名披露下司不申候、乍去陸奥守撰津守紀伊守八守を附申候、百官名も下司不申候、造酒正市正八其俣申候

一節句松平左兵衛佐披露二八名字名下司共二申候

享保元七月六日

当番 松平宮内少輔

金地院 護持院大僧正 護国寺僧正 大護院

右向後五節句名披露二不及候

一參勤其外御礼之面々者名字下司共二申候、中務式部兵部刑部

民部大藏杯之少輔者少と申候

一御暇之節名字名計申候下司不申候、是又陸奥守紀伊守撰津守

造酒正市正者下司申候、無官之縫殿助權之助杯者助を可申儀

二候由是八下司二而八無之故御暇之節たり共名之通致披露可

然候

一御立座之節同苗之者二三人も披露之時者初計苗字ヲ申跡者同

共不申名計申候

松平太郎左衛門松平源七郎杯ハ何人有之候而も苗字名共二
別ニ披露申候事、惣而御立座御目見(マ)経キものたり共先ハ名
披露二候へ共左様無之者も候之間其節古例可懸吟味候

一御立座之節御当地并遠國小役人同所之者式人罷出候得者銘々
名を不申所々のもの二而も耆人ツ、御目見二候得者名を申候

縦令大坂御役人共或ハ二条大坂御役人共御勘定之者も右同
断御用ニ而外江罷越或ハ御用相仕廻参上之節兩人共二罷出

候得者御用之品を披露申候、縦令ハ銀吹替御用相勤罷帰ま
した御勘定之者共或ハ何方江罷越まする御役人共御役人ニ
かぎらす分の罷出候得者御勘定等之者尔ても苗字名共二

致披露候

一御次一同隠居跡目初而御目見之者有之節者寄合小普請小役人
医師等ハ分々ニ披露申候得共、近来ハ其儀無之御礼之品計致

披露候

縦令家督隠居初而御目見之者共与申候、隠居不罷出候へ者
家督初而御目見之者共与申候

一年頭御礼罷出候ものたり共三月ヨリハ御年頭と不致披露候

一御勝手羽目之間ニ而御勘定方或ハ御馬方御鷹方或医師方御右
筆之面々共御通かけの御目見申上事有之候、其節今度被召
出候悴共者披露依首尾其仁之名を披露之事も有之候

一彈正大弼ハタイヒツニ而候此段前田出雲殿承合治定候事

一大御番組頭御目見之時八人共二銘々名字名共二申候

一御馬献上之節ハ御馬何疋と披露申候

但元和二戌年四月

御馬献上之時自今以後毛付ハ不及披露候、御馬員数計披露

可仕候旨

一大監物ハ監物と計之事

正徳二辰四月十四日水野監物大監物と御改被仰出候事平常

不相唱候得者為心得被仰聞候由、大久保加賀守殿当番本多

彈正少弼江被仰聞候由

一享保元申九月朔日

当番

松平伊豆守

今日伊予守息初而御目見伊予守御礼被申上候、前々ケ様之
節御披露不被致候、併其身御用ニ而被為召候ハ、格別右之
通杯之御礼之節ハ向後披露可然由同役中申談候、尤伊予守

今日披露被勤候

一 享保三戌十一月十一日 当番 松平備前守

御礼前加納遠江守奏者番江被申候者、御勝手之御披露いつも

早過候間被成御成得者御足留り御見廻し被遊候節致披露候様

二と被申聞候

一 享保四正月十三日 当番 朽木民部少輔

大坂御具足奉行 松平新兵衛

同所金奉行 根岸権兵衛

御代官 小林又左衛門

御数寄屋頭 村田恵斎

右伺之上大坂御役人共小林又左衛門村田恵斎と披露いたし候、

御数寄屋頭披露若年寄衆被勤候儀も有之候付山城殿江伺候得

者若年寄衆江聞合候様と御申候故承合候処、御勝手御礼之次

而拙者共致披露候様二と長門殿御申候二付致披露候

一 職檢校ハ職之字御礼書二無之候而も職檢校と披露申候、御前

迄御同朋頭手を引罷出候

享保四亥四月廿八日之御礼書二ハ池川檢校と有之、職之字

ハ無之候得共去年長谷川職檢校御礼之節も相同候而職之字

ヲ付披露有之例書朽木民部持参、依之今日者伺無之池川職

檢校と酒井修理大夫披露之

延享三寅正月十五日久米川檢校

御代替之御礼之節先例之通久米川職檢校と披露相濟申候

一 享保六年十二月廿七日 当番 高木主水正

幸阿弥伊予

右歳暮之御礼之節只今迄苗字計披露有之候得共向後名共二

披露二成候事

一 真之御太刀者銘茂致披露何之誰御太刀何と披露申候

但享保七年四月方真之御太刀献上相止

綿式拾把

金 三枚

御馬一疋

家督之御礼 青山因幡守

御馬献上候処披露例之通相濟申候

享保七六月丹羽式部少輔廻状二有之通因幡守名之下附札二而

申来候、是ハ只今迄無之儀故如此也

一 御黒書院二而両番頭御三家從御国元上使帰并新番頭益之日光
帰披露無之儀茂有之由、近年ハ惣而披露有之候事

但前々ハ其節伺之上二而披露有之候得共近来ハ伺二も及不
申候事、且又御三家御国許上使帰御座之間二而御目見被仰
付候義も有之

新番頭日光江被遣候事近来相止

左之通

享保九年辰六月八日盆二付日光江例年新番頭ヲ拝遣候得共、

向後被遣間敷由被仰渡候

享保十二年壬正月朔日

当番

松平伊豆守

日光山

医師

療病院

右昨晦日松平左近將監殿御祝式書当番松平玄蕃頭江被成御渡
候節療病院初而罷出候二付披露之儀被伺候処、名披露二不及
日光山医師与可致披露旨被仰聞右之通披露相濟候

宝曆十三未年二月朔日

当番

内藤大和守

日光山医師

療病院

右日光山医師与披露相濟

一 御納戸構或御黒書院御勝手在番之御番衆同悴御目見之時ハ二
条江罷越まする御番衆或二条在番帰御番衆与致披露候、上意
有之而御老中御差合相濟而御番衆せかれ共と致披露候

一大坂同断

一 駿府同断

但悴壹人罷出候節者せかれと計申候

例

元文二年九月朔日

当番

増山河内守

駿府在番之御暇御書院番せかれ壹人出候二付駿府江罷越ま
する御番衆上意御差合有之而御番衆悴ト披露相濟申候

宝曆六年十月十五日駿府在番帰御番衆悴一人罷出候

当番

松平紀伊守

一元文四年四月廿八日

今日御礼衆之内入御之節日光見分帰之者ト披露有之候、尤先
格有之候間右之通致披露候段当番紀伊守殿伊豆殿江被申達候

事

一 寛保元酉年五月廿九日

当番

松平備前守

左近殿被申候由前々方も被仰出候通御礼之節披露之者院下僧
正者披露相濟退候而披露之者可相退候、御暇之節六人程も罷
出候節ハ可相退候、参勤御礼等之節者披露相濟見計イ可相退
由二御座候、其外之披露も御礼衆退被申候而披露之者可罷立
候

寛保三^(ママ)四年八月廿八日

当番
松平備中守

奥平大膳大夫悴婚姻之御礼名代当人山城守罷出候二付先格之
通披露之儀松平左近将監殿江相伺如先格奥平大膳大夫与披露
相濟候、ケ様之儀向後伺二不及儀二相聞候由順阿弥申候二付
向後不及伺候事と申合候

一右同日御次吉田侍従三位披露黒田大和殿吉田侍従之三位と披
露有之

一寛延二巳年三月二日

公家衆御対顔之節雨天二付地下御板縁頼之御目見無之於帝鑑
之間御目見吉田大藏卿使者披露青山因幡殿地下之披露稲葉丹
後殿被勤候、因幡殿御白書院之方上座二被居次二丹後殿被居
披露も吉田之披露先二而地下之披露ハ跡二而候事

一寛延二巳年四月廿八日御用番右近将監殿当番松平紀伊守江被
仰聞候者、当時同役御人多二付長袴披露之者半袴披露ヲ兼相
勤候儀無用二而御人少之時ハ格別之由被仰聞候

一寛延二年十一月十五日

朽木土佐守江御用番伯耆守二逢被申候者、御礼衆披露相濟御
取合有之候而も立急候衆有之候ハ、披露人方心ヲ付居立可申、
此段急度被申候二而者無之候得共何も申談置候様当番金森兵
部少輔江被申候二付申来候事

一寛延四未年三月十五日公家衆東本願寺御対顔当番鳥居伊賀殿
落縁之披露左之通

撰家方御門跡方使者
本願寺家来

伝奏家来

衆人惣代

御冠師

御烏帽子師

御末廣師

右本願寺家来七人罷出候得共先格二付家来共とハ披露無之

一 御数寄屋頭宇治江御暇并帰府之節外二御披露之席有之候へ者

御奏者番御数寄屋頭計二而候得者若年寄衆披露被申候

但其節若年寄衆江可申談候事

宝曆四戌年壬二月廿一日左之通御書付出候已後御奏者番披

露二相極り候事

例年御数寄屋頭宇治江罷越候節并罷帰候則御黒書院御勝

手二而御目見之節御数寄屋頭計り候へ者若年寄披露候得

共向後御奏者番披露二相成候間得御意候

一 宝曆四申戌年閏二月朔日 当番 黒田大和守

廻状追而

年始御礼披露之儀正徳六申年閏二月朔日窺之上御年頭卜

披露相濟候二付其通披露可仕哉与左衛門尉殿江以順阿弥

相伺候処、御年頭と披露いたし候様二と被仰聞候付年始

御礼之分御年頭と披露相濟申候、為御心得申進候

一 宝曆十三未年七月朔日 当番 土屋能登守

大坂在番御暇大御番頭加納大和守森川下総守御礼書二有之候

処御黒書院月次御礼之内同役之内吉人於羽目之間松平撰津守

殿可被逢申旨被申越候二付土佐守参候処同人被申聞候者、加

納大和守今日御奏者番被仰付候大御番頭本多対馬守被仰付候

之間直二御暇被仰出候付如例御前江可差出旨大目付稻垣羽州

御目付三枝帯刀江も被申達候間申談候様二と被申聞候、但本

多対馬守差出候順之儀如何可致哉と撰津守殿江土佐守承候処、

順之無差別森川下総之上加納大和名前之所江差出可然由被申

聞其通相濟申候

一 明和二丙七月朔日 当番 土岐美濃守

土井大炊頭悴御目見御礼申上候以後伺之上御披露被相勤候事

寛保二八月十五日 当番 朽木土佐守

一 永井伊賀殿参勤御礼已後御人少二付何も申談被致披露候

儀左近殿江申達候処、其通り可致旨被申聞披露被相勤候

一 同年八月十五日 当番 松平伊賀守

戸田大炊頭参勤之御礼申上候已後伺之上御披露被相勤候事

享保十年九月廿八日 当番 丹羽式部少輔

一 太田備中守御役儀之御礼被申上直披露も被相勤候

一同年九月朔日

当番
加納遠江守

久世出雲守寺社奉行加役之御礼申上候已後伺之上御披露被相勤候事

一同年十月朔日

当番
戸田大炊頭

土井大炊頭領知之御朱印被下候已後御人少二付伺之上御披露被相勤候事

一明和三年二月朔日

当番
戸田長門守

去月廿八日

若君様御襤着御祝儀有之、御礼無之二付今日遠州見付上村清兵衛御礼申上候付伺之上御次一同披露三人二而相濟申候

一十万石以上之嫡子ハ惣而上意有之候由

例

宝曆七丑年七月廿八日
当番
本多長門守

初而御目見
伊与守嫡子
兵部
阿部百之助

右披露相濟夫江与上意少罷出御取合有之而退去

一明和三戌年九月十五日

当番
仙石越前守

右披露相濟夫江与上意少罷出御取合有之而退去

但御太刀諸大夫之疊目差置申候

一寛延二巳年正月廿八日

当番
牧野因幡守

御暇
右近将監嫡子
初而
小笠原伊予

右小笠原伊予与披露

但於御次御暇拜領物被仰渡一度御前江罷出

下ケ札
右近将監殿江伺之上
無識之格二相濟申候

一宝曆五亥年十二月廿八日

当番
永井伊賀守

病後之御礼

左衛門尉嫡子
伊予
酒井撰津守

右披露相濟御取合有之而退去

一明和三戌年十月朔日

当番
土岐美濃守

病後之御礼

伊予守嫡子
伊賀
阿部豊前守

右披露相濟御取合有之而退去

但如先格上意無之候、進物下方二疊目諸大夫之通差置

初而御目見
左衛門尉嫡子
双方長袴
能登
酒井豊太郎

一采女殿被申聞候ハ駿府在番婦御番衆之披露前々

駿府在番婦御番衆と披露

駿府婦御番衆と披露

右両例候得共駿府在番婦と披露之方古格之処悖信院様御代御礼衆御急キ之節無急度御沙汰も有之候哉短く披露致し候方宜敷趣二付駿府婦御番衆と披露有之候由、当御代二而ハ御礼衆御急キも無之候付駿府在番婦と披露可然旨土佐守申聞候由

正月六日本山先達共不罷出候節披露不仕候段御用番江申達候事

例

宝曆二申年正月六日

当番

松平周防守

伊勢内宮外宮

山崎諸国神主共

右伊勢内宮外宮山崎諸国神主共与披露

廻状追而

一今日御礼之内本山先達共不罷出候付披露不仕候段伯耆守

殿江以順阿弥申達其通相濟申候

当番

酒井飛驒守

宝曆九卯年正月六日

一今日御礼之内本山先達共不罷出候付披露不仕候段左衛門尉殿

江以春阿弥申達其通相濟申候

宝曆十四申年正月六日

当番

牧野越中守

一今日御礼之内本山先達共不罷出候付披露不仕候段右京大夫殿

江以春阿弥申達其通相濟申候

当番

松平能登守

明和四亥年正月三日

一長崎忠七郎江朱座不罷出候付披露之儀明日美濃守懸合置候間尚又承合候処、右京大夫殿江伺候処前々御披露有之候間献上物も仕候付披露有之積奥之伺も相濟候、依之病氣之御書付も

不相渡旨申聞候、御書付も不出事付御役方二而者不存事致披露候積申談因茲本役衆江も右之段内々心得二申聞置候、尤廻

状二も朱座不罷出段者認不差出候

明和四亥二月十五日

助番

土岐美濃守

一右近將監殿江以順阿弥御礼書悖名字認有之候得者名字致披露

候先格之処今日者同と有之候二付先格名計致披露候、依之名

計致披露候旨御届申候処御承知之段同人申聞候二付三河江雲

八郎八十八与披露相濟申候

例 享保十二未年

正月廿八日

御納戸構

御暇

二条御鉄炮奉行

井上三郎兵衛

初而御目見

三郎兵衛惣領

同 岩次郎

右井上三郎兵衛岩次郎与披露

延享三寅年十月十五日

御納戸構

御暇

二条御鉄炮奉行

初而

武嶋左兵衛

初而御目見

左兵衛梓

同 左膳

鳥目

右武嶋左兵衛左膳与披露

明和四亥二月十五日

助番

土岐美濃守

一佐竹右京大夫着座之儀前方御届無之近格御届有之二付右近将

監殿江以順阿弥着座無之心得二為致稽古候旨申上候

例 明和元申閏十二月廿一日

当番

久世出雲守

妹婚姻之御礼

松平安芸守

着座無之心得二罷在候旨当番より御同朋頭を以申達候

明和二酉正月廿八日

当番

内藤大和守

婚姻之御礼

松平安芸守

着座無之心得二罷在候旨当番より御同朋頭を以申達候

明和三戌二月十五日

当番

西尾主水正

婚姻之御礼

松平相模守

着座無之心得二罷在候段右近将監殿江常阿弥を以申達候

但近例右之趣廻状江附札致し差出候得共今日者同役衆申

談之上差出不申候

明和四亥年二月晦日

当番

仙石越前守

一左兵衛佐養子友之進五節旬月次登城有之候、養父左兵衛佐御

礼相济候次江罷出候段大井勢州被申聞候

明和四亥年三月朔日

助番

仙石越前守

一昨日拙者廻状之通松平友之進今日月次初而御目見之節之通今

日茂四品之格二而名披露致候心得罷在候段周防守殿江以三阿

弥申達其通可致旨被仰聞松平左兵衛佐次江罷出相济申候

明和四亥年三月三日

一松平左兵衛佐例之通溜諸衆次江罷出拙者致披露候、松平友之

進五節句初而出仕養父左兵衛佐次江罷出恩披露御番順二而相

名代
小出伊勢守

濟申候

附札

明和四亥年六月十五日

当番
大岡兵庫頭

伊豆守殿江伺之上小出信濃守卜披露相濟、信濃守

一今日大炊頭出雲守御法事御用相勤候二付御目見被仰付候、其
後披露被相勤候、尤其段右近將監殿江以順阿弥申達候

△
病氣二付為名代当人罷出候先格も有之候事二候得
共被相伺候処弥小出信濃守と可致披露旨被仰聞其

例

通相濟

宝曆十三六月十五日

当番
大岡兵庫頭

一年始御礼病氣二付朱座不出例左之通

一今日何茂申談候上飛驒殿御用濟後披露被相勤候、尤其段

享保十六年

右近將監殿江以春阿弥申達候

元文四年

明和三戌年六月十三日

当番
戸田采女正

明和四亥八月朔日

当番
西尾主水正

一今日出羽守嫡子佐渡守御暇二付着座之儀寛延三年松平伊予
守部屋住侍従二而御暇被下候節伺之上再篇御前江罷出候節着

一朱座就病氣不罷出候得共披露如何致候哉と伊予守以順阿弥尋
二付、進物出候間例之通致披露候心得二罷在候段申達其通相

座有之二付、何茂申談右近將監殿江以常阿弥相伺例書も同人

濟申候、此段為御心得申進候

江為見候、出羽守悴御暇之御礼着座無之心得二罷在候段以同

明和三戌年三月十八日

当番
大岡兵庫頭

人申達候、何茂伺之通心得候様被仰聞候事

肝煎美濃守頼二付
土井大炊頭

元文三年七月廿三日

当番
松平備中守

入御之節御通りかけ

悴婚姻之御礼
小出信濃守

山吹之間

右家督初而御目見之者共与披露

家督
一同之御礼 相模 △

初而
一同之御目見

△下札
相続不罷出候付家督
初而御目見之者共与
披露相済申候

明和四丁亥八月十五日

当番
土岐美濃守

一今日堀長門守悴婚姻之御礼病氣二付為名代当人堀図書被出候、

元文三年小出信濃守殿例も有之二付追而二うたひ可申哉と土

佐守江及相談候処、最初先格無之故左も可有之候今日者出し

不申方可然旨申聞候付差出不申候事信濃守殿例左之通

元文三年七月廿三日
当番
松平備前守

追而

一小出信濃守悴婚姻之御礼病氣二付名代当人出候間披露之

儀伊豆守江承候処、信濃守と可致披露旨申聞其通相済申

候事

明和四丁亥年閏九月朔日

当番
土岐美濃守

一今日駿府在番御暇御書院番せかれ四人出候筈之処三人病氣二

付左之御書付伊予守殿順阿弥を以御渡被成候、依之共之字不

申悴と披露いたし候段順阿弥を以御届申達候、尤廻状江者右
之訳不差出共之字消候迄之事

卷上

御奏者番

大目付 江

御目付

閏九月朔日

御礼書之内御書院番せかれ共

右四人出候筈之処三人病氣二付不罷出候

延享三寅年正月十五日
当番
松平主計頭

御納戸構

大坂御普請御用仕廻罷婦候
御勘定組頭
宮田平四郎
同 御勘定
矢口五左衛門

附札

宮田平四郎矢口五左衛門与披露相済申候

寛延二巳年六月朔日

当番
酒井山城守

御納戸構

右野呂猪右衛門田中八兵衛与披露

但御用相勤ました御代官共与披露可有之歟名披露之方も同
様之事二付申談之上名披露二而相濟候

寛延二巳年九月十五日

御納戸構

上州安中郷村引渡御用仕廻罷婦候

御代官

野呂猪右衛門

上州前橋郷村引渡御用仕廻罷婦候
御代官

田中八兵衛

当番

永井伊賀守

日光御靈屋御修復見分御用仕廻罷婦候
御大工頭

福田久左衛門

同

御作事下奉行

桜井勘右衛門

右申談之上両人名披露二而相濟申候

宝曆四戌年四月廿八日

御納戸構

当番

金森兵部少輔

上総下総国新田見分御用仕廻罷婦候
御代官

吉田源之助

日光御宮御靈屋其外御覺御用仕廻
罷婦候

御覺奉行

秋野彦次郎

右名披露相濟

一今日御納戸構例も御座候間御用相勤ました者共与披露可仕
哉前方も三人右類例之儀御座候、其節も右之通披露御座候
与当番方被相同候処、隠岐守殿被仰候者両人二而候間名披
露可致旨御指図相濟申候

宝曆五亥年十二月廿八日

入御之節御通かけ

御黒書院御勝手

当番

永井伊賀守

中国筋水損虫附場検見御用仕廻罷婦候
御勘定

久保田十左衛門

三州大樹寺并信光明寺見分御用仕廻
罷婦候

御作事下奉行

海野源兵衛

右久保田十左衛門海野源兵衛与披露

宝曆八寅年六月十三日

入御之節御通かけ

御勝手之方

当番

内藤大和守

右御用相勤ました者共与披露

宝曆十一巳年十月朔日

御納戸構

日光諸堂社御修復見分御用仕廻罷婦候
御大工頭
千種庄兵衛

同
御作事下奉行

大熊新助

当番
太田撰津守

伊豆相模国御林見分御用仕廻罷婦候
林奉行

牧野惣十郎

巡見御用仕廻罷婦候
御勘定

成瀬久蔵

随自意院宮上京二付差添罷越候
医師

田中俊川

右御用相勤ました者共田中俊川与披露

宝曆十三未年七月朔日

入御之節御通かけ

御黒書院御勝手

当番
土屋能登守

日光御宮外遷宮其外御堂
見分御用仕廻罷婦候
御覺奉行

勝田弥三郎

右御用相勤ました者共与披露

明和三年七月十八日

御黒書院御勝手

濃州勢州其外海東筋堤川除
御普請所見分御用仕廻罷婦候
御勘定
野田弥一兵衛

当番
戸田采女正

上州世良田御宮御修復出来栄
見分御用仕廻罷婦候
御勘定組頭

栗林平五郎

上州世良田御宮其外御修復御用
仕廻罷婦候
御作事下奉行

中岡半九郎

右御用相勤ました者共与披露

明和五年三月十五日

御納戸構

当番
西尾主水正

上総国望陀郡論所
見分御用仕廻罷婦候
御代官

遠藤兵右衛門

日光御宮御靈屋本坊其外
御覺見分御用仕廻罷婦候
御覺奉行

小知三右衛門

右遠藤兵右衛門小知三右衛門与披露

右名披露与御用相勤ました者共与両例有之候内、名披露之

方二八御差函有之も御座候事二付今日申談之上名披露二而

相済申候

明和五子年九月十五日

御納戸構

当番
遠藤備前守

三州吉田橋御普請
御用仕廻罷掃候
御普請方

小林市左衛門

同

同改役

武藤弥右衛門

右小林市左衛門武藤弥右衛門与披露

一今日御納戸構御披露之儀名披露又八御用相勤ました者共

与区々二候処、名披露之方先格多分二付名披露二而相済

申候

寛延三年七月廿八日

当番
大岡越前守

御黒書院

御暇

松平加賀守

御白書院

松平加賀守家来 越前

前田大炊

右松平加賀守家来前田大炊西尾隼人与披露

西尾隼人

一御礼書二つり無之二付先格之通一所二差出候旨御用番江
申達置候

廻状追而二左之通

一加賀守家来二人釣無之、御礼書出候付前々之通一人二而
披露可仕哉之旨伯耆守殿江以春阿弥申上候処其通可致旨
被仰聞相済候

明和二酉年六月十一日

当番
牧野遠江守

御黒書院

御暇

上使老中

松平加賀守

牧遠江

御白書院

松平加賀守家来

二人

津田玄蕃

出雲

伴八矢

右松平加賀守家来津田玄蕃伴八矢与披露

一加賀守家来名前釣無之候付先格之通一同二差出し候段右

近將監殿江無急度以常阿弥申達候処、前々之通心得候様

二被仰聞候付一同二差出相濟申候

明和四亥年四月廿八日

御黒書院

当番
牧野遠江守

御暇

松平加賀守 牧遠江

松平加賀守家来

二人

前田修理

不破彦三

右松平加賀守家来前田修理不破彦三与披露

一加賀守家来名前前釣無之二付先格之通一同二差出申候段伊

予守江以順阿弥申達其通相濟候

明和六丑年四月廿八日

御黒書院

助番

内藤大和守

御暇

松平加賀守 大和

松平加賀守家来

二人

大音帶刀

煩

松平大式

右松平加賀守家来大音帶刀与披露

但御用番江以御同朋頭前々之通二人一同二差出候段申達候儀先格之処、松平大式煩二而不罷出一人二付御届無之

兩人罷出候節者一緒二御前江差出披露も兩人一同致候事、

拜領物者入御已後於躑躅之間被仰渡頂戴三度二出候、松

溜二而之被仰渡者無之候、紛敷有之候付重而之為見合記

置

明和四亥年正月三日

御白書院御次

長門

当番
松平能登守

上京 下京 大坂 堺 奈良 伏見 過書

銀座 朱座 五ヶ所割府之者共

御年頭

但今日朱座不罷出候得共右之御書付も不出献上物茂有之、

表江不相知候二付例之通披露有之候事

同年八月朔日

入御之節御白書院

御次板縁

披露遠江

奈良惣代

銀座

銀座

一 朱座就病氣不罷出候得共披露如何致候哉与伊予守殿以順阿弥御尋候付、進物出候間例之通致披露候心得二罷在候段申達其通相濟申候

明和六丑年八月朔日

当番
西尾主水正

入御之節御白書院

御次板縁

披露兵庫

奈良惣代

銀座

銀座

一 朱座就病氣不罷出候得共進物出候間例之通致披露候心得二罷在候段周防守殿江以三阿弥申達其通相濟申候

明和六丑年十月十五日

当番
松平丹後守

一 今日御次一同之披露之内山田三方惣代之披露通用山田与唱候
処山田与唱候旨相糺候処申候付山田与致披露候段右近将監殿
江申達候事

一 四品以上表出礼之分五節句月次初而罷出候節八前広二御用番

方大目付江御書付相渡候、其旨大目付衆当番江被達候節当番

方廻状被差出申候、初而出礼之節直二披露いたし候御届等無之

宝曆五亥年五月十五日

当番
永井伊賀守

一 松平藤次郎今日月次初而出仕二付御礼席之儀表侍従之次江罷出候旨能勢因州被申聞候、且又酒井次郎四郎同断、榊原式部大輔次江罷出右何茂惣披露相濟申候、為御心得申進候

宝曆七丑年十一月廿二日

当番
青山因幡守

一 松平大学頭嫡子徳之進五節句月次御礼之節表四品松平備後守

次江罷出候由大井勢州被申聞候

同年十二月朔日

当番
朽木土佐守

一 松平徳之進今日月次初而出仕表四品松平民部大輔次江罷出惣披露相濟候、為御心得申進候

宝曆八寅年十一月廿二日

当番
阿部飛驒守

一 有馬定五郎五節句月次御礼之節表四品之末御譜代四品之上江罷出候由大井勢州被申聞候

同年十一月朔日

当番
戸田采女正

一有馬定五郎今日月次初而出仕表四品之末御譜代四品之上江罷

出惣披露相濟申候

明和三戌年十月廿九日

当番
内藤大和守

一松平光丸五節句月次御礼之節表向四品之次江罷出候由池田筑

州被申聞候

同年十一月朔日

当番
久世出雲守

一松平光丸今日月次初而出仕藤堂与右衛門次江罷出惣披露相濟

申候

明和五子年二月十九日

当番
大岡兵庫頭

一筒井和州為心得被為見候書付之写一通進之候

別紙

大膳大夫嫡子

松平岩之丞

五節句月次御礼登城之事

但表向四品之次蜂須賀千松丸次江可被出候

同年三月朔日

当番
大岡兵庫頭

一松平岩之丞今日月次初而出仕蜂須賀千松丸次二罷出惣披露相

濟申候

明和五子年十二月十二日

助番
内藤大和守

一酒井雅樂頭嫡孫承祖酒井徳太郎五節句月次御礼之節御普代四

品之末江罷出候段筒井和州被申聞候

同年三月十五日

当番
仙石越前守

一酒井徳太郎今日月次初而出仕松平隠岐守次江罷出惣披露相濟

申候、為御心得申進候

同日

一太田備後守婚姻之御礼申上候以後伺之上熨斗目之俣披露相勤

被申候

宝曆七丑年正月六日

当番
森川兵部少輔

一今日御礼之内本山先達壱人罷出候付其段左衛門尉殿江以春阿

弥申達本山先達与披露相濟申候

明和五子年正月六日

当番
牧野越中守

一今日御礼之内本山先達壱人罷出候付其段右近将監殿江以順阿

弥申達本山先達与披露相濟申候

明和六丑年正月六日

当番
牧野豊前守

一今日御礼之内本山先達不罷出候付披露不仕候段右近将監殿江
以順阿弥申達其通相濟申候

元禄十一寅年二月十五日

御次一同

紅糸二十斤

筆五十対

筆三十対

右者御立座之節遠国寺社御年頭長崎町人高木作大夫小法師石
見善三郎与披露之

享保二酉年正月十五日

御次一同

銀馬代

同

紅糸二十斤

当番

久世出雲守

年頭

遠国寺社

播磨

参上

高木作大夫

同

小法師石見

同

石見子

善三郎

当番

土井伊予守

参上

松平太郎左衛門

源太左衛門養子

初而

大久保平四郎

年頭之御礼

遠国寺社

御代替之御礼

長崎

高木作右衛門

右松平太郎左衛門大久保平四郎遠国寺社御年頭長崎高木作右
衛門与朽木民部殿披露

享保六丑年四月廿八日

御次一同

大緒十懸

右長崎高木作右衛門与酒井修理殿披露

享保九寅年五月廿八日

御次一同

大緒十懸

右長崎高木作右衛門与松平相模殿披露

享保十三申年十一月十五日

御次一同

大緒十懸

当番

内藤丹波守

参上

長崎

高木作右衛門

当番

高木主水正

参上

長崎役人

高木作右衛門

当番

土井甲斐守

参上

長崎

高木作右衛門

同

古筆見

了延

扇

右長崎高木作右衛門古筆了延与牧野駿河殿披露

明和六丑年二月十五日

御次一同

当番
太田備後守

年始之御礼
遠国神社

手助三掛

参上
三州鳳来寺代官
庄田与三兵衛

扇子

同
与三兵衛せかれ
同 弁吉

紅白縮緬三十卷

年頭之御礼
長崎会所調役

色純子十卷

後藤惣左衛門

長崎会所調役後藤惣左衛門当年初而罷出候付

附札

披露之儀右京大夫江以順阿弥相伺候処、長崎

後藤惣左衛門与披露可致旨申聞候付其通相濟申候

同
同
小法師勝見

同
勝見倅

同 善三郎

右遠国寺院御年頭庄田与三兵衛弁吉長崎後藤惣左衛門小法師

勝見善三郎与披露

明和六丑年四月廿八日

助番
内藤大和守

一大炊頭兵庫頭今日被為召候得共四時登城之事二付、当番方同

役病人も有之候付御用御礼通二候ハ、兩人共可致御披露哉之

段周防守殿江以御同朋頭相伺候処、致披露候様被仰聞候

但御用有之被為召候節五時登城二候ハ、披露不相勤、五半

時之登城二ハ御用番江伺之上御用前披露相勤候事、且月次

者五時平日者五半時之御用二候得者披露不相勤候事

寛延二巳年十月五日

当番
朽木土佐守

御白書院

駿府加番備
伊賀
半袴
加藤出雲守

右披露相濟御取合有之退去、上意無之

同
寄合
同丹後
井上修理

右同断

例再兩人一同二罷出候得共此度者老度可差出旨右近將監殿

御差図有之、右之通相濟

但出雲守二ハ故有之上意、無之例二者不相成候事

宝曆五亥年十一月朔日

当番
井上河内守

御白書院

右披露相济御取合有之而上意又御取合有之而退去

駿府加番届
寄合 河内
斎藤喜之助

右同断

同
長門
米津小大夫

宝曆六子年十月十五日

御白書院

当番
黒田大和守

右老入宛罷出披露相济退去再兩人一同罷出御取合上意又御取合有之而退去

駿府加番届
兵部
関播磨守
寄合 紀伊
酒井兵部

但去年之通兩人二付忝度御前江罷出候様可仕哉之旨隠岐守殿江以春阿弥申達候処、三人之通兩度御前江差出候様同人を以被仰聞其通相济

明和七寅年十月十五日

御白書院

当番
内藤大和守

駿府加番届
美濃
寄合 大和
九鬼式部少輔
阿部式部

右老入宛罷出披露相济退去其後二人一同罷出御取合上意

又御取合有之而退去

御礼書釣有之候付兩度御前江差出候心得二罷在候旨佐渡守

殿江以順阿弥申達候

宝曆十二年六月朔日

御白書院

当番
久世出雲守

御道具
御馬印

御暇
上使老中 披露半袴
采女
宗対馬

右披露相济夫江与上意御敷居之内着座以上使御暇拜領物之御礼老中差上之緩々可致休息候、御腰物被下旨御意有之老中持出御敷居之内二而頂戴、御次之間江退キ刀帶之重而罷出御取合有之、御馬被下旨上意又御取合有之

着座之儀但馬守殿江以春阿弥相伺候処着座有之旨御同人被仰聞候

縮緬五卷
金馬代

官位之御礼 双方長袴
土佐
同人

右侍從御太刀御敷居之内一疊目之下二置披露、夫江与上意少罷出御取合有之

明和元年閏十二月廿八日

当番
久世出雲守

御白書院

侍從之御礼 双方長袴

縹紗五卷

金馬代

松平安芸守

牧遠江

右披露相濟夫江与上意少罷出御取合有之而退去

但御太刀御敷居之内下方一疊目之下二置之

引太刀

銀馬代

官位之御礼
「久留嶋信濃守」番頭衆

同断

京都町奉行
「大田播磨守」

同断

御台様御用人
「森山近江守」

右御取合有之披露無之

妹婚姻之御礼 兵庫

松平安芸守△

右披露相濟夫江与上意少罷出御取合有之而退去

着座無之心得二罷在候旨当番方御同朋頭

其身ハ長袴
附札 例之通披露

を以申達候

△ 半襦二而相
濟申候

寛保元酉年八月十五日

当番
松平備中守

御黒書院

御勝手御通懸

駿府御目付

御暇
時服二

菅沼藤三郎 備中

右披露相濟御取合有之上意

廻状追而

一菅沼藤三郎御目見之節今日者御黒書院御勝手御敷居外際二而

ハ上り過候間、御敷居外少下り候而罷在披露ハ例之所二罷在

候様二与左近將監殿被仰聞其通相濟候、為御心得申進候

明和八年卯年十月十八日

当番
井伊兵部少輔

出御之節御黒書院

御勝手御通りかけ

金五枚

御暇

時服三

初而 禁裏附
高刀式部 豊前

羽織

披露大紋の俣
其身服紗小袖半袴

右御錠之口明キ候与於西湖之間御縁類右京大夫殿御暇拜領物

被仰渡相濟例視披露より少下り披露、豊前守罷出着座其次江

式部罷出披露、人方少下り罷在但御障子之方々壹疊目從御上段出御高刀式部

与披露御取合上意又御取合有之

廻状追而

一高刀式部御目見之節披露之儀寛保元酉年八月十五日之通御黒

書院御敷居外二少下り罷在候様相心得可申哉与昨日周防守江

以順阿弥当番越中守相伺候処、其通相心得候様申聞候、且右二

付披露着服之儀も同人江以同人は又越中守相伺候処、大紋之

俣致披露候様申聞其通相济申候、此段為御心得申進候

明和九辰年六月朔日

御勝手より

当番
太田備後守

参上
佐渡奉行
菅沼新三郎
能登

右披露相济御取合上意御取合有之而退去

但骨折之上意二而御尋之上意無之

享保六丑年二月十五日

御勝手より

当番
内藤丹波守

参上
京都
山脇道立
式部

右山脇道立与丹羽式部殿披露

享保十六亥年五月十五日

御次一同

当番
戸田越前守

比宮御方御供仕罷下候
禁裏御医師
玄蕃
向井元桂

御次御疊縁

同
法皇御針医
御園意齋

一向井元桂御園意齋後藤撰津守与披露相济申候

右廻状名之下附紙二而申来

延享三寅年十二月朔日

御勝手より

当番
朽木土佐守

参上
京都
山脇道作
青因幡

右御取合無之

一束一卷

初而御目見
道作倅
山脇玄侃
青因幡

右名披露

寛延二巳年四月朔日

御次御疊縁

当番
井上遠江守

五十宮御方御供仕罷下候
閑院宮家司
大和
平田伊賀守

同
京都医師
御園主計権助

石川洞安 同

右伺之上閑院宮家司平田伊賀醫師御園主計石川洞安与披露

寛延四未年六月六日

入御之節御通りかけ

御勝手

井上遠江守 当番

日光新宮二附添京都方罷帰候

醫師

長福三而

上領玄碩 遠江

右上領玄碩与披露

宝曆七丑年十二月十六日

帝鑑之間御敷居外

松平周防守 当番

聖護院御門跡

家来 周防

医師

右捧物前二置平伏、御次之御襖障子老中 左衛門尉 開之御下段公方

様大納言様立御之節聖護院御門跡家来醫師与披露相濟

宝曆十三未年十二月朔日

御次一同

朽木土佐守 当番

次目之御礼

山脇道作 采女

国友助大夫 参上 鉄炮張

同 善兵衛 同

右山脇道作国友助大夫善兵衛与披露

明和九辰年九月朔日

御次一同

太田備後守 当番

随自意院宮江從禁裏御差添被遣罷下候

中村静安 禁裏醫師 兵部

右名披露

安永二巳年二月朔日

廻状追而

松平能登守 当番

一今日御規式書之内病氣二付不罷出候面々御書付一通主殿頭

以三阿弥相渡候、右御書付之写追而御規式書之写相廻候節

可差進候、且日光山社家不罷出候付其段同人江以同人申達

東叡山社家与披露相濟申候

享保八卯年三月廿八日

御次一同

丹羽式部少輔 当番

銀馬代

初而
平右衛門子
式部
小浜仙之助

一束一本

参上
奥州柳津
主水
円藏寺

御上下二具

同
呉服飾
茶屋宗有

紅糸一斤

同
銀座年寄
尾本太左衛門

色鳥子紙百枚

同
舞し
幸若弥次郎

扇子

同
同
同 徳左衛門

右柳津円藏寺茶屋宗有銀座年寄幸若弥次郎徳左衛門与披露

同十二年未年閏正月十五日

当番
高木主水正

御次一同

銀馬代

初而御目見
七郎左衛門惣領 黒豊前
山本主税

一束一本

入院之御礼
遠州大神村 伊豆
秋葉寺

右遠州秋葉寺与松平伊豆殿披露

御太刀披露之部

一 御黒書院江出御御三家并御嫡方御目見并伊掃部頭松平讃岐守松平肥後守出席御目見申上之、次旧臘叙爵之面々国持之四品八大馬代時服を以御礼、御譜代之四品八大馬代を以御礼、御奏者番披露之四品已下ハ小馬代を以御礼或ハ五人或ハ六人ツ、太刀目録持参御礼、番頭太刀目録引之、但十万石已上ハ大馬代二而御礼申上候得共四人五人之内二候得者馬代ハ御前江不出候、次国持隠居之面々或ハ三ケ目之内差合等煩之面々太刀目録持参御礼是又馬代ハ御前江出し不申候、四品已上引太刀奏者番勤之諸大夫引太刀ハ御書院御小性組之両番頭役之

一 旧臘叙爵之面々江諸司代江之口宣等之奉書月番老中被仰渡之一真之御太刀并御馬上リ候時ハ其仁之名披露二而引続而御太刀之銘付并御馬之員数を申候也

一 御三家之御太刀并御嫡子方御目見又ハ右之衆中より年始八朔御名代之使者ハ御老中披露也、其外ハ御三家御国許之使者二而も奏者番披露也

一 旧臘官位之面々御礼正月七日相济候事も有之、尤極月廿八日

二相濟も有之

享保四亥年十二月二十八日

当番 松平備中守

一官位之御礼衆之内金馬代有之候得共何も申談毎々之通大馬代

御前江八出し不申候

元禄十五年六月九日

当番 三浦壹岐守

御黒書院

時服二十

黄金五十枚

元服之御礼 壹岐 松平若狭守

真御太刀 備前信房

右松平若狭守御太刀信房与披露

享保十四酉年十二月十五日

当番 小出信濃守

御黒書院

真御太刀 備前国正恒 代金十枚

竹姫君様御入興 披露 無地熨斗目 加録長襦 相濟候付

白銀百枚

信濃 松平大隅守

卷物三十

熨斗目長襦 何も加録 自身子持筋

白糸百斤

右御礼御奏者番披露御、太刀目錄引之大隅守御次江退キ進物

引之松平大隅守御太刀正恒与披露

真御太刀 来国秀 代百五十貫

黄金十枚

披露同前 増河内 松平上総介

卷物二十

名代 阿部伊勢守

綿五十把

子持筋無之加録 熨斗目長襦

右次第同前進物引之松平上総介御太刀国秀と披露、来八不申

候

明和三戌年四月七日

当番 牧野越中守

御黒書院

若君様江之御礼公方様被為請

御太刀 越中国国房 代金五枚

御鎧 諸具備 壹領

披露長襦 土美濃 井伊掃部頭

御弓 重藤 壹張

御矢 二十五

御馬 鞍置 壹疋

右出座御目見御太刀目錄御奏者番披露、井伊掃部頭御太刀国

房御馬壹疋与披露退去

但御太刀疊目下方三疊目之上ノ縁ヲ少シ明候

長袴披露之部

御太刀 平安城長吉
代金五枚

一御太刀献上之披露

御馬 鞍置 沓疋

同断
兵庫
松平肥後守

但半年代之参府役所帰在番帰等ハ半襠

右出座御目見御太刀目録御奏者番披露、松平肥後守御太刀長

一四品已上官位之御礼

吉御馬沓疋与披露退去

但四品已下官位之御礼二者披露無之

一 国持并万石以上交代寄合参勤之御礼

一 万石已上初而御目見

一 御役儀之御礼

一 御加増之御礼

一 城地拝領之御礼

一 嫡子成養子之御礼

一 隠居之御礼

一 家督之御礼

一 分知之御礼

右之類万石已下ニ而茂独礼之分

一 増上寺金地院護持院知恩院重立候御礼之節披露進物番長袴

一 吉川左京

一駿府御城代参上之御礼長袴二而罷出候得ハ長袴二而披露、半

半褙披露之部

袴二而出候得者半袴二而致披露候

一惣而御暇

一御三家之家老城代参府其外御礼

一半年代参勤之御礼

但自分御礼申上候節其身半袴二而出候得者披露半褙二而致

一婚姻之御礼

し候事

一在番歸之御礼

享保廿一辰四月廿八日酒井下総守長袴二而罷出披露、秋元但

一加番歸之御礼

馬守長褙二而相濟候、延享二丑年四月廿八日松平豊前守半袴

一湯治歸之御礼

二而罷出披露、本多紀伊守も半褙二而相濟候、寛延三午年四月

一病後之御礼

十一日松平豊前守同断披露、朽木土佐守同断二而相濟候

一上使御目付歸之御礼

一御用被仰付遠国歸之御礼

一陪臣独礼

但御三家家来家老城代之外ハ陪臣二准

一悴御目見之御礼

一御立座御次一同

一寺社并惣而町人

但御立座之分

一御通懸

一 阿蘭陀かびたん

一 役所御暇

一 惣而遠国御役人帰参之御礼

但諸司代御城代大坂御定番ハ右之部ニ而ハ無之長袴也、大

坂御定番参上之御礼之節長袴ニ而相濟候事も有之

一 駿府御城代

但長袴之事も有之、長袴之部に委し

一 御手伝御普請出来ニ付御目見

一 覗披露ハ御人少之節ハ長袴ニ而も兼相勤候

但以御同朋頭其段老衆申上候

永井伊賀守留

元文三年四月十五日

当番
松平備中守

一 松平阿波守熨斗目半袴ニ而罷出候間御太刀を以御礼之儀ニ候

間肝煎松平紀伊守殿阿波守江坊主衆を以被尋組頭吉田長佐阿

波守家風故半袴被着候旨申聞候付、何茂江紀伊殿被申談家風

と有之候間其旨ニ差置披露、服紗袷半袴進物番も右之通被着

候様紀伊守殿被申達候、御礼過我等儀部屋ニ罷在候処其阿弥

罷越右近將監殿阿波守半袴被着候儀御尋之由被申聞候間同役
共心附候付相尋候処、家風之由申聞候間其通ニ致披露進物番
も半袴ニ仕候段申達候、其已後御沙汰も無之候

披露割之部并手札心得

一披露ハ御番之近キ者より段々重キ事相勤候、月次御礼日杯ハ当番惣披露いたし候故御立座ハ明日之番之者、御納戸構者明後日之番之者と相勤候

一長袴之御礼衆壹人有之時ハ壹人長袴着披露候得共、兩人有之時ハ披露も兩人二而勤候而も宜候事

先年松平備前守長袴披露之節急ニ鼻血出披露難仕事有之候、其節者長襠着被申候、同役外ニ有之故替り被勤候由備前守

物語被申候

一披露替仕候事も三方替者不仕事

一肝煎ハ前日之番之者相勤候、御黒書院御白書院共御闕際ニ罷在御礼衆段々ニ罷出候様ニ進物并御披露等順々に違不申様ニ

差引仕候

一月次惣披露中ニ申誤候而も惣披露之間ハ引不申候、相濟候而跡之披露ハ外江替へ指扣之儀伺可申候事

右正徳五申年六月廿八日当番高木主水正廻状ニ申来

一大和守殿紀伊守殿有合之同役羽目之間江御呼候而伊予殿近江

殿私罷出候処今朝御礼衆侍従四品一同罷出候、御御書付二つ

り懸り出候得共心付相伺可申処無其儀候、向後ハ少之儀二而も念を入無遠慮相伺申候様御兩人二而被仰聞候、心付伺不申

儀不念之義ニ御座候、向後之儀同役共可申談由御挨拶申候、山城殿江も其後懸御目右之趣申達候、私共江被仰聞候以後右兩

人大目付衆江も右之趣被仰聞候由御座候、委細者紙面難調候間荒増申入候

披露割

一御白書院月次四品以上

一肝煎

一御次一同

一御納戸構

一御黒書院御勝手御通かけ

一長袴

一両組頭

但土佐殿二而ハ組頭、長袴師伝之方二而者長袴組頭

一入御之節山吹之間

当番

前日当番

翌日当番

其次当番

其次当番

其次当番

其次当番

当番

一右之通二而御次一同御納戸構等無之節者段々順之通繰上ケニ披露割いたし候

一月次御礼無之節者御黒書院出御御披露割当番ヲ初御番之順ニ

可致半袴之披露有之ハ当番勤之不残長袴之節者当番茂長袴勤之隠居家督之外者御次ハ先無之有之節者当番ニ而勤之

一倍(陪)臣御礼之節者太刀札左之通

何之誰家来

程村紙大サ此位続キ御礼之節者主人

何之何某

苗字略し縦ハ陸奥守家来と計認ル

是ハ当番之節心懸白紙ニ而持參御城ニ而認ル御三家家来城代

以上者肩書無之城代以下者何殿使者或者家来と肩書認之

一吉川左京肩書無之太刀札ニも不及

一引太刀御番之順ニ勤之

但御礼衆当番之節引太刀順者操替不申当リ引太刀除キ候事

一御礼衆相知次第御披露割可附之、当番ニ而前日取ニ来次第披

露割認差遣候之事

一当番之節前日ニ極リ披露附御礼書中奉書横帳ニ認附之披露之、

人数ニ応し折本二三冊交銘々望次第指出候心得ニ而御城江持

參之事

一御礼書附候外ニ小札数多持參可致候事、御城ニ而附替候事有之故也

一御礼書披露割附不致二三冊持參之事、是ハ西丸御番仁進物番江も替候や高家衆杯望候事も有之

年始披露割

元日

一引太刀

御番之順

一人見 久志本

当番

一後藤 本阿弥

二日之当番

二日

一喜連川

当番

一御代官

三日之当番

一渋川

四日之当番

一職人とも

五日之当番

三日

一上京下京

当番

一 三人之家来

四日之当番

候仁江者西丸当番江相頼一所二遣之、尤登城無之同役衆有之

一 江戸町年寄

五日之当番

節者是又手紙二而差遣候事

一 御納戸構

六日之当番

認方大方左之通中奉書折本也

御謡初

元日

一 大夫広蓋

当番

入御之節御白書院御次

一 惣目録

四日五日之当番
兩人二而勤之

人見又兵衛
[誰] 当番之常之御披露子札ヲ用

六日

一 伊勢内宮外宮

当番

七歳

一 春木大夫

七日之当番

久志本左京

一 千人頭

八日之当番

治部

一 出家中

九日之当番

内蔵允

一 寺社山伏

十日之当番

民部

同所

[誰] 二日当番也

但年頭御披露割古来者御番之日定り有之候処近年西丸当番

後藤

添等有之二付、惣而御番之順尔披露割いたし候事も当り之
御番差合候節くり上ケ候事

本阿弥

一年始御披露割右之順二而極月廿八日当番御城二而正月御番割

狩野

と一所同役衆江相達候、西丸当番江者手紙二而遣之添二被出

呉服師

二日

大広間

幸阿弥
職人共

誰 当番也

喜連川左兵衛督

誰 三日当番

入御之節御白書院御次

御代官

医師共

誰 四日当番

渋川六蔵

西川忠次郎

吉川源十郎

大柳八左衛門

福田久左衛門

連歌師

同所

誰 五日当番

井関治郎左衛門

三日

大廊下

職人共

柳原小平太

誰 四日当番

奥平大膳

家老共

井伊兵部

御白書院御次

誰 当番

上京 下京 大阪 堺

奈良 伏見 過書 銀座

米座 五ヶ所 割付之者共

同所

誰 五日之当番

当所町年寄惣町中

入御之節御納戸構

誰 六日之当番

岩松兵部

六日

大広間御下段

誰 九日之当番

出家中

同所

伊勢 内宮 外宮

山崎 諸国 神主

本山 先達共

同所

寺社山伏

入御之節御白書院

千人頭

伊勢因幡

同所

春木大夫

山本大夫

徳川満徳寺 是八年ニヨリ出府在之
寺社方江前方承合候事

正田隼人

右之通一紙折本認之、但し当り御披露差合候節者操上ケニ相(繼)

成候、御番之順ニ操上ケ可申事

但六日之御披露ニ寺社奉行ハ除キ候事

誰 当番

一三ケ日御規式書極月廿八日廿九日之内之当番江被成御渡候ニ

付直二三ケ日当番江遣候御披露割之通付ケ、引太刀之順其日

当番役本紙并折本ニ写一通引太刀之順計折本ニ一通都合三通

致持参候事、尤御披露附共附候事

誰 十日之当番

但折本ハ中奉書半切也

一引太刀之順初メ一ツ江左之通引太刀ト認跡ハ名計也

誰 八日之当番

引太刀誰 如斯也、常ノ小札方少々大ブリ也

二月朔日

一上野惣中 翌日当番

一日光准后家来 当番

右之外御番之順尤当番ヲ初メニして附之

但日光准后妙法院御門跡使者日光新宮等ハ高家披露也、御

規式書ニも出ル

公家衆御対顔之節

一引太刀 御番之順

一地下使者其外御冠師 当番

一吉田三位 翌日之当番

五月五日

一 山王别当神主井関

御番之順

五月五日

当番

松平越前守

丹後

三ヶ日
当番

観理院僧正

山城

四ヶ日
当番

樹下兵部

越前

翌日
当番

井関次郎左衛門

遠江

右寛延二巳年之例也、井関者御通懸故翌日当番にて勤ル、中奉

書二ツ折裏白ニ認

但小札なし折附書也

八月朔日

一 引太刀

御番之順

一 奈良惣代

二日之当番

五節句

一 松平越前守

当番

手札認様之事

一 惣而御暇之節御披露名字名計認下司無之

但陸奥守撰津守紀伊守八下司共認候事、釣懸り候分一紙二

認候事

一 参勤御礼之節者下司共認之

一月次御礼四品以上名字下司無之名計一紙二認之、尤陸奥守撰

津守紀伊守者右同断之事

但数多候故一紙両面ニ認松平越前守八四品之末江一行間ヲ

置可認書合ニ寄侍從四品と片面江書分候事、宜何ニも侍從

四品之サカへハ一行間ヲ置候事

一 四品以上之手札月次御番近キ御方江承合猶又吟味之上前日認

持参、別段半切ニ右名前認切者成御坊主相頼登城之節引合病

気差合等ニ而登城無之衆得与吟味之上手札ヲ墨ニ而消

但月次惣披露者表向四品以上并御譜代四品以上ナリ、松平

越前守八末ニ出ル

一 遠国之寺院者或ハ京大坂又者三州様卜肩書認之、御府内ニ候

之ハ不及肩書候

寛延二巳十一月十五日当番金森兵部少輔廻状追而之内

一 御礼衆御披露相济御取合有之候以後、立急候衆有之又御取合

無之衆も立急候者、御披露人より罷立候様二心附可申旨何茂

右輔ヲ除キ披露

申談置候様二と土佐殿江伯耆守申聞候由被申候間、為心得申進候

一家督初而御目見其外一年之御暇參勤交代寄合共御太刀馬代を以御礼之分披露之者其身共長袴着用

一半年御暇參勤之方湯治帰婚姻之御礼双方共半袴着用

一御門跡方両本願寺其外堂上方御披露高家衆被勤候、平日使者

右同断、其内吉田侍従三位使者計公家衆参向之節例年御年頭

二出候得共御奏者番披露

但撰家方使者青蓮院御門跡円満院御門跡使者両伝奏家老衆

人物代御冠師御烏帽子師御末広師、此分年頭其外御奏者番

披露

一撰津守紀伊守

右下司付披露

一彈正大彌小

右彌ヲ附披露

一少輔

手札表大方

但し下二認ル
ハ裏也、字頭
上下二可認

師伝物披露手札

出羽	丹後	中務	土佐	彈正	掃部	左京	和泉	中務	右京	大炊	織部	玄蕃	安芸	薩摩
越前	下総	美濃	修理	民部	左兵衛	大膳	兵部	隱岐	伊予	大蔵	大炊	播磨	大学	

朽木流物披露手札

裏						表								
筑後	上総	雅樂	三安芸	大学	備後	内蔵	土佐	出羽	彈正	一掃部	中務	左京	薩摩	
		左兵衛	四	備前	下総	佐渡	右京	信濃	遠江	二上総	大炊	播磨	中務	

正月朔日

入御之節御白書院御次

御年頭	民部	内蔵允	式部	久志本左京	七之助	七蔵	人見又兵衛
-----	----	-----	----	-------	-----	----	-------

同所

御年頭	職人共	幸阿弥	呉服飾	狩野	本阿弥	備後
-----	-----	-----	-----	----	-----	----

正月二日

入御之節御白書院御次

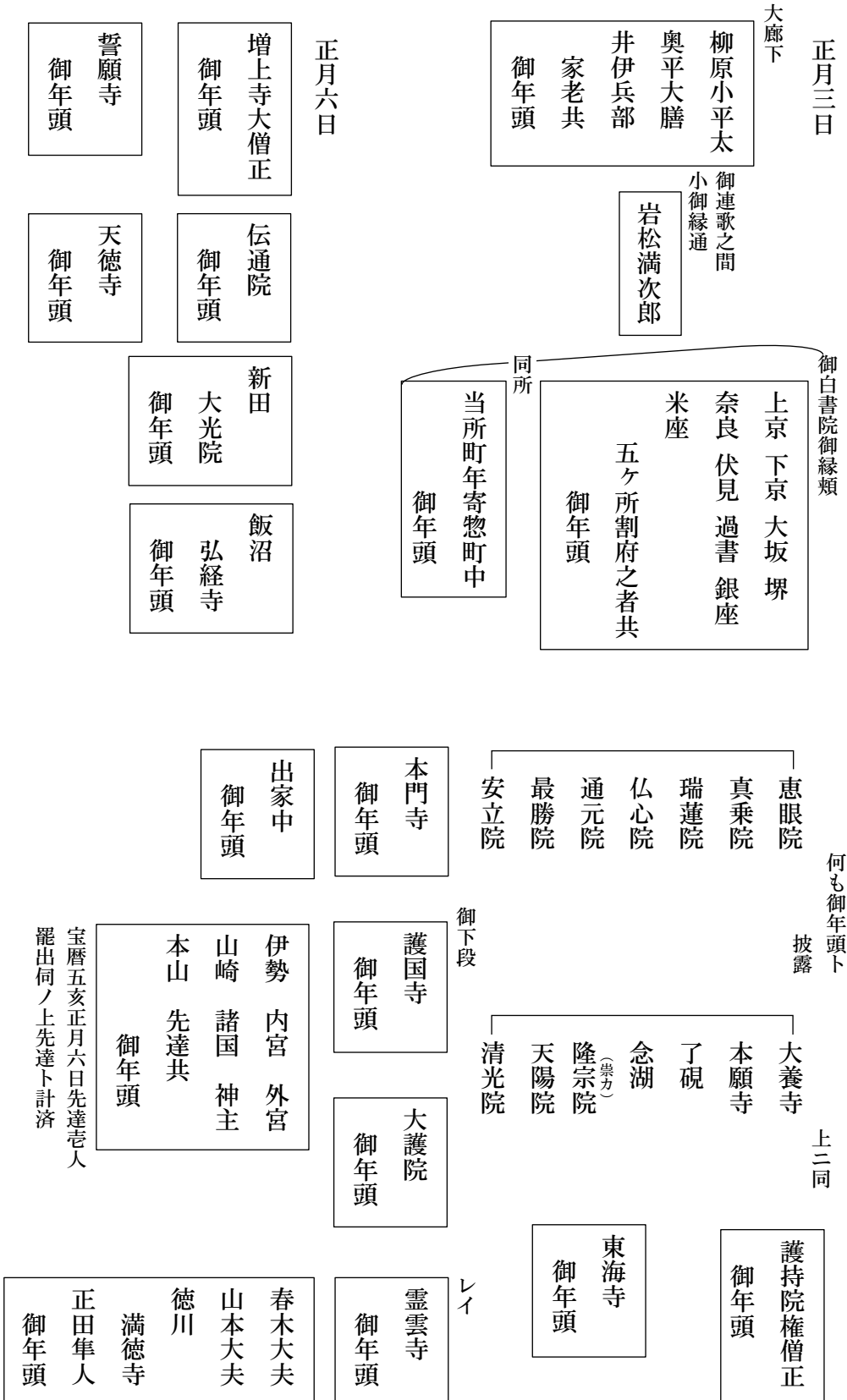
御年頭	醫師共	御代官
-----	-----	-----

入御之節御白書院御次

御年頭	連歌師共	千種庄兵衛	福田久左衛門	吉川源十郎	佐々木文次郎	山路弥左衛門	渋川図書
-----	------	-------	--------	-------	--------	--------	------

落縁

御年頭	職人共
-----	-----



正月十五日

寺社山伏
御年頭

観理院権僧正
御年頭

伊吹左門
御年頭

三州
東観音寺
御年頭

遠国寺社
御年頭

千人頭
伊勢因幡
御年頭

昌泉院
御年頭

芝崎宮内
明神神主
御年頭

駿州
宝台院
御年頭

足利
学校
御年頭

樹下兵部
御年頭

大乘院
御年頭

遠州
可睡齋
御年頭

高野聖方
大徳院
御年頭

正月廿八日

三井寺惣代
三井寺惣代
円宗院
御年頭

遠国寺社
遠州見付町人
上村清兵衛
遠州見付
上村清兵衛

八幡
豊蔵坊
御年頭

泉州ノ境
泉州
旭蓮社
御年頭

二月朔日

山門惣代
御年頭

武州仙波
喜多院権僧正
御年頭

莊巖院
御年頭

日光山惣代
御年頭

円覚院
御年頭

自証院
御年頭

住心院
御年頭

凌雲院大僧正
御年頭

龍王院
御年頭

護法院
御年頭

使僧也

三州鳳来寺
医王院
御年頭

宝曆九卯二月

京
麟祥院
御年頭

知恩院方丈
御年頭

日光御門跡家来
万里小路治部卿
野沢近江
山口図書
田村権右衛門
衆人共
御年頭

八幡社惣代
御年頭

三州
医王院
御年頭

日光御門跡家来
大西大蔵
近藤大和
下村備中
田村権右衛門
衆人共
御年頭

遠国寺院
御年頭
長崎町年寄
福田六左衛門
小法師石見
善三郎

宝曆五亥二月十五
薬師寺宇右衛門

遠国天台宗と有之
事も有り

上野惣中
遠国寺院
紅葉山
宣甫
永閑
日光山
東叡山
社家共
御年頭

納経拝礼
之御礼
一東巻本

葵献上
加茂社人共

知恩院代僧
八幡三社務
加茂貴布祢
社家惣代
遠国社家

二条江罷越まする
御番衆
御番衆せかれ共
川津中務
宇佐大官司
知恩院使僧善相寺
知恩院代僧

南都
龍松院
本因坊
宗看
碁将碁之者

京
成就院

京清水寺

間宮久太郎
遠山十次郎
新見伝左衛門
今福次大夫
春日左太郎
小林角右衛門
飯高市十郎
後藤弥右衛門

両組頭名披露

参上
二条御蔵奉行
中川
御代官
大草
長崎表御用仕廻罷帰候
御勘定
小野
中川伝五郎
大草太郎左衛門
小野左大夫

名披露二て相濟
悴 岡本周防
紀州刺田比古民部

参上 継目共
刺田比古神主

御勘定見分役
児嶋孫七郎
御納戸構御代官参上
山本平八郎
阿蘭陀
かひたん

紫衣惣代

京南禅寺大宝院
真長老

相州藤沢

藤沢

遊行上人

葛城婦

住心院使僧

住心院

二条在番婦
御番衆
御番衆悴共

或八大坂婦駿府
婦と認ル

京南禅寺

真長老

紫衣西堂惣代

武州山田広園寺

演西堂
カシ

御次一同

知恩院前大僧正代僧

善想寺

伯寿悴

狩野寿石

銀座年寄

平野作左衛門

大津惣代

舞し

幸若小八郎

同 同 万次郎

同 同 小左衛門

武州広園寺

演西堂

知恩院代僧

狩野寿石

銀座年寄

大津惣代

幸若小八郎

万次郎

小左衛門

住職之御札

上州世良田長楽寺
遍明院権僧正

見分仕廻罷婦候

御勘定吟味役

堀江荒四郎

同

御代官

小野彦四郎

検地御用仕廻婦

御勘定

山崎岡右衛門

宇治婦

御数寄屋頭

村田恵斎

大坂町人

尼崎又右衛門

上州

遍明院権僧正

堀江荒四郎

小野彦四郎

見分相勤

ました御

勘定之者

御勘定大勢なれハ者とも

久能御修復御用仕廻罷婦

御覺奉行

一人

御大工頭

一人

御作事下奉行

一人

上州渋川

上州

真光寺権僧正

参上鉄炮張名披露

国友徳左衛門

久能御用相勤
ました者共

隱居家督
初而
御目見之者共

隱居出されハ
家督初而
御目見之者共

御用勤婦
御勘定組頭
御勘定
御用相勤ました
御勘定之者共

御用勤
御代官
御勘定
者共
御代官共
御用相勤ました

参上
御代官
御用勤
御勘定
御代官共
御用相勤ました
御勘定之者共

御用勤
御代官
参上
御代官
初而御目見
後藤
後藤猪三郎
御代官共

御次一同参上
遠州
二諦坊
翠簾屋
徳助

御用勤
井沢
参上
御代官
井沢弥惣兵衛
御代官共

御札書二ハ
久米川檢校卜計
久米川職檢校

歳暮之御札
山王神主
樹下兵部

樹下兵部

同
神田芝崎
明神神主

アキウ
粟生
光明寺

御次一同
仙石民部
本因坊
宗看
碁将碁之者
茶屋宗味
銀座年寄共

河州壺井八幡神主多田隱岐
河州八幡神主

御次一同
連歌師共
銀座之者共
円阿弥

参上南都法隆寺惣代西南院
南都法隆寺惣代

参上
二条御門番之頭
松波
御用仕廻
御代官
御勘定見分役
御大工頭
御作事下奉行

御用勤
御勘定組頭
御勘定
御数寄屋頭

御納戸構
後藤庄三郎
呉服師共
幸阿弥因幡

松波五郎右衛門
御用相勤
ました者共

御用相勤
ました者共

御暇

御具足奉行

設楽兵藏

御用勤

小普請方

小普請方改役

設楽兵藏
御用相勤
ました者共

高野行人方巴陵院

高野行人方組頭

巴陵院

高野行人方組頭
巴陵院

御次一同

大峯婦

当山二宿

放生会相濟候付

八幡神官

下堺御送宮之御礼

八幡山惣代

当山二宿
八幡神官
八幡惣代

御次一同

遠州

二諦坊

狩野舟川

遠州
二諦坊
狩野舟川

参上御代官

式人

御勘定見分役

朝比奈

御代官共
朝比奈弥一郎

参上鉄炮張

国友吉兵衛

彦介

藤九郎

国友吉兵衛
彦介
藤九郎

参上御代官一人ハ
名披露

鈴木小右衛門

御暇鉤り有之分一紙

半年代り参勤鉤り之分ハ一人充也
尤不及御手札候事

戸田越前
内藤備後
松平豊後
松平丹波

参上

三州罷在候

扇子 松平源五郎

年頭之御礼

遠国寺社

同

遠州見付町人

扇子 上村清兵衛

御次一同

松平源五郎

遠国寺社

御年頭

見付町人

上村清兵衛

日光御用仕廻婦

古筆見

古筆

了延

古筆
了延

御疊奉行

御大工頭二人

御暇 大坂御金奉行

鵜飼

学頭職之御礼

吉野山学頭

正親院僧正

吉野学頭

正親院僧正

太田摂津守
永井伊賀守
石川内膳正

日光御用相勤

ました者共

鵜飼左十郎

日光御用相勤
ました者共
鵜飼左十郎

八幡三社務名代

八幡三社務

寛延二己三月二日 御対顔当番

地下 取替ニテ 例

撰家方 使者

丹後

青蓮院御門跡 使者

知恩院御門跡 使者

円満院門跡 使者

近衛殿 家来醫師

両伝奏 家老

三条西宰相中将 家来

楽人惣代

御冠師

御烏帽子師

御末広師

寛延三年宝曆申年有

前左大臣等有之節ハ兎角前下

云字ヲ除

撰家衆御門跡方使者

近衛殿家来醫師

伝奏家老

三条西宰相中将家来

楽人惣代

御冠師

御烏帽子師

御末広師

是ハ元文三年ノ例也

延享三丙寅年正月十五日

御代替之御礼

上醍醐行人中惣代

本紀伊

松仲坊

醍醐行人惣代

御次一同 寛延二己 四月朔日

参上

奥州柳津

同 円蔵寺

同 南都

同 龍松院

同 本因坊

同 碁将棋之者

奥州

同 円蔵寺

同 南都

同 龍松院

同 本因坊

同 碁将棋之者

右同日御次御疊縁

五十宮御方御供仕罷下候

閑院宮家司

閑院宮家司

同 平田伊賀守

同 平田伊賀守 醫師

同 京都醫師

同 御園主計 石川洞安

同 御園主計権助

同 石川洞安

同 石川洞安

当番

高木主水正

一享保四亥十二月朔日

入御之節御通かけ御黒書院御勝手

府中婦

御馬預り

前々例相見へ不申候故記置 伴藤右衛門

若年寄衆披露

一寛延二己巳四月廿八日御次一同

参上

河州壺井八幡神主

多田隠岐

参上

舞し

幸若内蔵介

同

同

与右衛門

同

同

彦五郎

同

同

与一右衛門

住職并権僧正之御礼

常州黒子千妙寺

龍王院権僧正

一延享三寅ノ五月十五日

当番

秋元撰津守

御次一同

入院之御礼

長崎 本蓮寺 本紀伊

一束一卷

御代替之御礼

扇子

京御畳屋

伊阿弥筑後

同

同

新八郎

大和

河州八幡神主幸若

内蔵介与右衛門彦五郎

与一右衛門

但し並へて書へし

常州

龍王院権僧正

長崎

本蓮寺

伊阿弥筑後

新次郎

谷口吉三郎

同

同

手助五懸

同御翠簾屋

谷口吉三郎

入御之節御通かけ

御黒書院御勝手

御用勤御代官

井戸助左衛

和泉

参上御代官

戸田忠兵衛

御用勤御勘定

式人

一同年六月朔日

介番

松平紀伊守

御次一同

御代替之御礼

秋撰津

遠国寺社

同

伊勢大湊

角屋七郎次郎

遠国寺社

伊勢湊町人

角屋七郎次郎

宝曆八寅十二月廿八日
牛込と認二不及
但し紫衣之
御礼二而候得とも
所書二不及事

濟松寺

覚樹王院

参上御代官四人

町医師初

御目見十五人

延享三寅ノ十一月朔日

後藤庄三郎

呉服師共

幸阿弥因幡

龜谷源之允

宝曆八寅十二月廿八
御礼書

呉服師源太郎養子

龜屋源之允と

有之候得共肩書

二不及間明ニも不及

同並ニ認事

御代官共

但し先格八名披露之由

初而

追而二有之

御目見之

一寛延二巳十一月十五日 金森兵部

御納戸構

御用勤御勘定組頭一人

同 御勘定二人

参上御代官六人

御用勤御疊奉行

秋野一人

御用相勤ました

御勘定方之者共

御代官共

秋野彦次郎

御用勤御代官

参上御代官浅岡

御用勤御勘定

御用相勤ました

者とも

浅岡彦四郎

一宝曆二申三月二日

当番

公家衆

御対顔之節

撰家方

使者

青蓮院御門跡

使者

知恩院御門跡

使者

伏見殿

家来

医師

西園寺前左大臣

家来

花山院前右大臣

家来

兩伝奏

家来

楽人惣代

御冠師

御烏帽子師

御末広師

撰家衆御門跡方使者

伏見殿家来医師

西園寺左大臣

花山院右大臣

家来共

伝奏家老

楽人惣代

御冠師

御烏帽子師

御末広師

鳥伊賀

右手札ニハ西園寺

花山院共二前ノ字ヲ除認ル

住職之御礼

京知恩院

知恩院方丈

長袴

知恩院役者

長香寺 大和

源光院 撰津

菅人ツ、出ル

知恩院役者

両院共

右宝曆三酉四月朔日右同断

相濟申候

宝曆二申五月十五日

御納戸構

御目見

甲府勤番

六人名前

大坂御城内御修復
御用仕廻罷帰候

御勘定組頭

壹人

御勘定

壹人

寛延三年五月十九日

日光方罷帰候

弘方御納戸組頭

奥御祐筆表御祐筆

小十人組頭御勘定組頭

添奉行小十人組御大工頭

御作事奉行

都合十六人

元文五申年七月朔日

入御之節御通かけ

御黒書院御勝手

甲州論所見分

御代官

原新六郎

宇治帰

御数寄屋頭

竹内友承

原新六郎

竹内友承

宝曆三酉三月朔日

御白書院

尾州熱田学頭

一束一卷 医王院

酉三月十九日

家督

煩 隠居

幼少 分知

尾州熱田医王院卜

披露相済申候

一同之御札

隠居分知不罷出候付

家督始而

御目見之者共と

披露相済申候

右披露手札

日光御用相勤

ました者共

同年同日

御次一同

参上

遠国寺社

初卯神楽御礼献上

八幡三社務名代

片岡左衛門

参上

御筆五十対 小法師石見

同 石見せかれ

同三十対 同 善三郎

申二月十五日

遠国寺院

長崎町奉行

後藤助左衛門

小法師石見

石見せかれ

同 善三郎

遠国寺院御年頭長崎

町年寄後藤惣左衛門

小法師石見善三郎卜

披露相済申候

寛保二戌九月十五日

久能御用相勤

ました者卜披露相済

附札

遠国寺社八幡三社務

小法師石見善三郎と

披露相済

御修復之御礼

鶴岡社一臈

一束一卷 相永院

同所

扇子一箱 神主

同所

同断 小別当

戊二月朔日

正僧正之御礼

日光山学頭

酉十月十五日

同日

鶴岡社僧

神主小別当

と披露相済

申候

青木市左衛門天野市十郎鶴岡

御用相勤ました者共田中俊庵

と披露相済申候

上総国龍浦郷村
請取御用仕廻罷帰候

御代官

吉田源之助

参上

御代官

風祭甚三郎

検地御用仕廻
罷帰候

御勘定

岩城直右衛門

同

同

市川庄左衛門

日光山学頭
修学院僧正

未十二朔日

巳三月十五日

奥医師

長春院養子

初而 武田養仙

附紙

披露進物番共

先格之通半袴

致着用候

延享五辰年

宝曆四

戌年

十一月朔日

竹田民部卿

御用相勤ました

もの共

御代官共

右之通二相済
申候

宝曆二申年

十二月十三日

吉田式部卿

右者寄合医師吉田意安

惣領初而

御目見之節披露

御納戸構

大御番

一 奥野一学

御代官

二 天野助二郎

御勘定組頭

三 児玉喜兵衛

参上御代官

四 五人

御大工頭

五 千種庄兵衛

亥八月十五日

松平又三郎家督之御礼松平周防守参勤之御礼小菅大学初而
御目見右三人共御前披露候得共、何も太刀披露二候間手札
不申

亥四月朔日

石原清左衛門
石原吉之丞
玉井檢校

付札
石原清左衛門
石原吉之丞
檢校惣代と
披露相濟候

亥七廿八

付札
井伊掃部頭家督之御礼
之節前々之通相心得可
申哉と伺之上其通相濟
追而
井伊大監物披露之儀伺
之上大監物と披露相濟申候

宝曆五亥十一月朔日

越後国新田場檢地

御用仕廻罷帰候

御勘定組頭

土山藤右衛門

同

御勘定

村山茂助

同

大岡十二郎

同

横原藤次郎

同

江坂孫三郎

参上

御代官

千種清右衛門

渡辺民部

山本平八郎

辻六郎左衛門

天野市十郎

池田政之進

布施弥十郎

越後国新田場并

損毛村之見分御用

西川半兵衛

甲州勤番

五人

御代官

三人

寛保二

戊五十五

御用相勤ました
御勘定之者共
御代官共と
披露相濟申候

甲州勤番御目見之
者共御用相勤ました
御代官共と披露
相濟申候

寅七朔日

参上

京都釜屋

御釜一口 浄味

付札

京釜屋浄味と
披露相濟申候

宝曆七丑五十五繼目披露

藤沢
遊行上人

阿部飛驒守

同日娘婚姻御礼
名代同能登守

同七廿八御修復之御礼
山門惣代
山門惣代
延命院

大坂帰御番衆
御番衆せかれ共

宝曆十辰八月廿八日
○丸八
上意有之所にて心覚

ヨミタンザワウジ
読谷山王子

鷹司殿青蓮院
御門跡梶井御門跡
家来医師
知恩院御門跡
使者

出雲

駿府江罷越まする
御番衆
御番衆せかれ共
三上伊之吉

西本願寺使僧
新門使僧伝法輪
家来
地下之者
楽人
役人共

大和

右明和二年酉五月朔日

日光山御法会相济候付参向之公家衆御門跡方御対顔之節日
光御門跡二も御対顔有之

助番
大岡兵庫頭

上野惣中
遠国天台宗
紅葉山
宣甫
清意
日光
東叡山
社家共

飛驒

日光御門跡家来
万里小路大進
大西大蔵
進藤周防
山口忠兵衛
田村権右衛門
権九郎
楽人共

能登

上野惣中
紅葉山
宣甫
清意
東叡山
社家共

大和

日光御門跡家来
吉川式部
大西民部
矢田陪豊前
楽人共

内膳

宝曆十年辰九月廿七日
助番
森川内膳正
將軍宣下御祝儀
相济候二付日光御門跡
御対顔

宝曆十年辰八月十三日
当番
土屋能登守
御代替為御祝儀日光
御門跡
御対顔之節

御三家陪臣披露

一 御三家御附人者御主人之御名不申其者之名字名計申候、双方

長袴進物番共二長袴着、御太刀引候節茂御同朋頭江渡申候事

一 御附人二而無之候而茂家老職之者ハ帶劍二而罷出、披露も御附人同断

右貞享四卯年七月晦日戸田山城守殿当番青山播磨守江被仰

渡候

一 御三家帰国之使者ハ長袴二而出候事も有之、其日二成承合半

袴二而出候ハ、自分御礼之節ハ披露も半袴二而可仕由高木主

水正被申候由松平備前守被咄候

一 御三家御家来家老城代御附人披露分ハ長袴披露二而誰家来与

ハ不申御目見致し候者之名計申候事

一 御三家御附人之せかれ之分ハ家老職勤不申候得共長袴二而披

露、御主人之御名茂不申候事

但元禄八年十月朔日成瀬小吉御暇之節ハ初而之儀二も候間、

御主人之御名も申候様二と加賀守殿御差図被成候事

一 御三家御家来家老城代御附人之悴迄ハ御前江小サ刀脇差共二

指申候而罷出候、守りを初其外何役勤候者二て茂小サ刀取申

候事

一 御三家方家老使者之節万石二候得者自分之御礼申上、万石已

下者継目等歟何も訳無之候而者自分之御礼無之由

一 御三家方御附人二而茂縦ハ尾張中納言殿使者成瀬隼人正与御

主人之御名申候

成瀬之部

貞享二丑年正月十五日

当番
御殿
尾張中將殿使者
土井周防守

元祿三年三月廿八日

当番
尾張中納言殿家老
三浦壹岐守

元祿三年九月十五日

当番
尾州江罷越候付
尾張大納言殿家老
戸田能登守

元祿五申年七月廿八日

当番
尾張大納言殿家老
成瀬隼人正

元祿八亥年三月廿八日

当番
尾張中納言殿家老
松平志摩守

元祿十二卯年四月廿八日

当番
尾張中納言殿家老
松平志摩守
成瀬隼人正

元祿十三辰年三月廿八日

当番
尾州江罷越候
尾張中將殿家来
成瀬右近

同年五月十五日

当番
尾州江罷越候
尾張中將殿家来
阿部飛驒守

同年十二月朔日

当番
尾張中將殿家来
松平弾正忠

元祿十四巳年四月朔日

当番
尾州江罷越候
尾張殿家老
成瀬隼人正

宝永四亥年十月十五日

当番
尾張殿家老
本多弾正少弼

宝永七寅年十一月七日

当番
尾張中納言殿家老
本多弾正少弼
成瀬隼人正

同八卯年正月廿八日

当番
池田丹後守

尾張江罷越候

尾張中納言殿家老

成瀬隼人正

当番

正徳二辰年三月廿八日

松平宮内少輔

参上

尾張中納言殿家老

成瀬隼人正

当番

同三年巳二月十七日

安藤右京亮

尾州江罷越候付

尾張中納言殿家老

成瀬隼人正

助番

同四年午四月朔日

高木主水正

尾張中納言殿家老

参上

成瀬隼人正

当番

享保三戌年四月朔日

松平宮内少輔

参府

尾張中納言殿家老

成瀬隼人正

主末

右双方長襦隼人正

太刀少下ケ置之

当番

享保三戌年六月十一日

高木主水正

同五年亥年五月朔日

双方半袴

当番

高木主水正

参府

尾張中納言殿家老

成瀬隼人正

因幡

同十六亥年六月朔日

双方長襦

当番

小出信濃守

上使之御礼

尾張宰相殿使者

差替

成瀬大膳

当番

松平伊賀守

参府

尾張宰相殿家老

成瀬半左衛門

双方長襦

当番

高木主水正

家督之御礼

尾張殿家老

成瀬半左衛門

同年八月廿八日

右御礼申上其已後罷出上意有之候

享保二十卯年四月廿八日

当番
土井甲斐守

上使之御礼

尾張中納言殿使者

成瀬大内蔵

帶劍二而

御前江罷出候

当番

丹羽和泉守

参府

尾張中納言殿家老

成瀬隼人正

当番

松平紀伊守

御転任御兼任

御元服御官位相濟諸御礼

被為請候付

尾張中納言殿使者

引太刀

松伊賀

成瀬隼人正

右尾張中納言殿使者成瀬隼人正与披露

自分之御礼

成瀬隼人正

右成瀬隼人正与披露

助番

松平豊後守

御暇

尾張殿家老

成瀬隼人

寛保四子年三月廿五日

右於御次拝領物被仰渡披露相濟御取合有之、御馬被下旨上意有之

宝曆二申年四月十五日

当番

阿部飛驒守

参府

尾張中納言殿家老

双方長袴

成瀬隼人正

右御太刀疊目諸大夫方少下ケ差置成瀬隼人正与披露、御取合有之而御太刀御床江上置間ヲ明下之方ニ差置、御供ニ而参府之時者御附家老ニ而も引候太刀障子之方ニ置

但同人稽古御白書院ニ而為致候筈之処、例御黒書院之旨申聞御黒書院ニ而稽古為致候

同年四月廿八日

当番

本多長門守

尾州江罷越候

尾張中納言殿家老

成瀬隼人

右於御次拝領物老衆申渡、其後御前江罷出御馬被下旨上意有之

但披露之節御主人之名不申候

同三酉年十一月十五日

当番

朽木土佐守

熊五郎殿七夜二付以
上使御祝儀被遣候御礼

尾張中納言殿使者
成瀬豊前

城代格二付帶劍

右尾張中納言殿使者成瀬豊前与披露、御取合有之

当番

宝曆六子年四月朔日 鳥居伊賀守

初而御目見

尾張中納言殿家老

隼人正嫡子

成瀬小吉

右披露相濟御取合有之而退去

御太刀二疊目之中下方下ケテ置之如先格御主人之御名不申候、

引候御太刀如常御同朋江相渡候

当番

戸田采女正

参府

尾張中納言殿家老

双方長袴

成瀬小吉

右御太刀諸大夫之疊目方少下ケ置之披露相濟御取合有之

但御主人之御名不申候

当番

朽木土佐守

同十辰年五月朔日

尾州江罷越候付

尾張中納言殿家老

成瀬隼人

右於御次御暇拜領物被仰渡御前江罷出披露相濟御取合有之、

御馬被下旨上意又御取合有之

当番

宝曆十三未年三月廿八日

土井大炊頭

尾張殿家老

成瀬隼人正

右於御次御暇拜領物被仰渡御前江罷出披露相濟御取合有之而御馬被下旨上意又御取合有之而退去、拜領物於躑躅之間頂戴之

成瀬主殿

右於御次御暇一同拜領物被仰渡御前江罷出披露、御取合有之、

拜領物於躑躅之間頂戴之

当番

朽木土佐守

参府

尾張中納言殿家老

成瀬主殿頭

右御太刀諸大夫之疊目方少下置之披露相濟直々御取合有之而退去

退去

但御主人之御名不申御太刀御同朋頭江相渡

同三戌年正月十五日

当番
大岡兵庫頭

尾張江罷越候付
尾張中納言殿家老
成瀬主殿

右於御次拜領物被仰渡御前江罷出披露相濟御取合有之而退去、
拜領物於躑躅之間頂戴之

同四亥年六月十五日

当番
大岡兵庫頭

上使之御礼
尾張中納言殿使者
成瀬豊前

右尾張中納言殿使者成瀬豊前与披露、御取合有之而退去

同五子年三月十五日

当番
西尾主水正

家督之御礼
尾張中納言殿家老
成瀬隼人正

右御太刀諸大夫之畳目方少下ヶ置之披露相濟御取合有之而退去、
進物引之再御前江罷出但元席上意御取合有之而退去

但御主人之御名不申帶劍二而罷出

附記 先格御前江兩度罷出候付其通可差出哉与右京大夫江以順

阿弥相伺候処、兩度差出候様申聞其通相濟申候

同年四月廿八日

当番
土岐美濃守

尾州江罷越候付
尾張中納言殿家老
成瀬隼人

右於御次御暇拜領物被仰渡御前江罷出披露相濟御取合有之、
上意又御取合有之而退去

但御主人之御名不申候

一御馬者御供二而罷越候節者御馬被下、自分二罷越候節者御

馬不被下候事

竹腰之部

一宝永七年寅三月廿八日尾張中納言殿家老竹腰民部今日繼目御
礼申上候、依之池田丹波守前方水戸中納言殿家老中山備前守
弟中山主殿初而御礼之例書被持参候左之通

宝永五子正月廿八日

初而御目見

中山備前守弟
中山主殿

右水戸中納言殿家老中山主殿与披露、右披露青山播磨守当
番本多弹正御月番相模守殿江相伺右之通也、如此書付持参
御主人之名を申候由二付松平備前守申候者、御三家様之家
老筋之者御主人之名ヲ申候例覚不申候段被申候得者、本田
弾正少弼被申候者、其節当中山備前守事ハ弟養子ニ而候故
伺、御主人之名ヲ不申候由二被申候、竹腰民部ハ養子繼目御
礼二付中山主殿与ハ訳違候、前々方御主人之苗字名不申候
二付不及伺竹腰民部与計松平備前守致披露候、尤其身熨斗
目長袴致着候、松備前江熨斗目長襠着申候間進物番ものし
め長袴致着候様ニと申談、双方并進物番茂熨斗目長襠着候
事

一弟養子ニても御三家御家老筋之仁ハ御主人之苗字名、御国

元より之使者ハ右別、其外者此已前方申候儀終ニ覚不申候
事

元禄三年九月十五日

当番
戸田能登守

尾張大納言殿家老
参上

竹腰筑後守

宝永四亥年九月十五日

当番
本多弹正少弼

尾州江罷越候

竹腰山城守

正徳二辰年三月廿八日

当番
石川近江守

尾張中納言殿家老
参上

竹腰山城守

同五未年五月廿八日

当番
松平備前守

尾張宰相殿家老
参上

竹腰壹岐守

享保三戌年六月十一日

当番
高木主水正

参上

尾張中納言殿家老

主水

竹腰壹岐守

双方長袴

右御太刀二疊目之内中程より下ケ候而置候

享保十五子年四月十五日

当番

丹羽式部少輔

参府

尾張中納言殿家老

竹腰志摩守

当番

松平備中守

参府

尾張中納言殿家老

竹腰志摩守

右披露相濟御取合有之

元文三午年三月廿八日

当番

松平伊賀守

尾州江罷越候

尾張中納言殿家老

竹腰志摩守

当番

土岐美濃守

尾張殿家老

竹腰山城守

半褙

右於御次拝領物被仰渡過而御前江罷出披露、上意有之御馬被

下之

宝曆四戌年三月十五日

当番

阿部飛驒守

右竹腰山城守与披露相濟御取合有之

但御太刀目録諸大夫之疊目方少下ケ置

同年四月朔日

当番

松平周防守

初而御目見

尾張中納言殿家老

山城守養子

竹腰壹岐

双方長袴

右竹腰壹岐与披露相濟御取合有之

但御太刀目録諸大夫之疊目方少下ケ置之

同十辰年五月朔日

当番

朽木土佐守

繼目之御礼

尾張中納言殿家老

竹腰山城守

右御太刀諸大夫之疊目方少下置之披露相濟御取合有之

但御主人之御名不申候

石河之部

天和四子年四月廿九日

当番
石川美作守
御暇
尾張殿使者

享保八卯年三月廿八日

当番
丹羽式部少輔
参府
尾張中納言殿家老

享保十七子年十二月十五日

当番
石河出羽守
因幡
松平玄蕃頭
家督之御礼
尾張中納言殿家老

享保十九寅年六月廿八日

当番
西尾隱岐守
家督之御礼
尾張中納言殿家老

右石河伊賀与披露

享保二十卯年四月廿八日

当番
土井甲斐守
尾張殿家老
石河伊賀守

於御次拜領物被仰渡其後御前江罷出披露有之

元文二巳年四月廿八日

当番
秋元但馬守
掃圀之御礼
尾張中納言殿使者
石河伊賀守

右尾張中納言殿使者石河伊賀与披露、伊賀半袴二而罷出候間披露茂半袴

自分之御礼
同人

右石河伊賀与披露

寬保三亥年四月朔日

参府
尾張中納言殿家老
石河伊賀守

右披露相濟御取合有之

但御太刀少々下ケ置之

延享二丑年二月十五日

当番
秋元撰津守
尾張中納言殿家老
石河伊賀守

右罷出尾州江御暇被下旨被仰渡当番退久、伊賀守拜領物八於躑躅之間頂戴、伊賀守退キ撰津守初之所江罷出ル

延享四卯年十二月十五日

当番
小堀和泉守

寛延二巳年四月廿八日

参府

尾張中納言殿家老

石河伊賀守

双方長袴

牧野因幡守

当番

尾州江罷越候

尾張中納言殿家来

石河伊賀

披露長袴

右於御次御暇拝領物老衆申渡、過而御前江罷出御取合

寛延二巳年十二月十五日

当番

本多長門守

参府

尾張中納言殿使者

石河伊賀守

双方長袴

右石河伊賀守与披露、御取合有之

但御太刀者疊目少下ケ置、引候御太刀御同朋頭江渡

宝曆二申年十一月十五日

当番

内藤大和守

尾州江罷越候

尾張中納言殿家老

石河伊賀

半襦

右於御次拝領物被仰付旨老衆申渡、過而御前江罷出披露御取

合

宝曆七丑年十二月十五日

当番

鳥居伊賀守

参府

尾張中納言殿家老

石河伊賀守

右御太刀少下ケ置石河伊賀守与披露御取合有之而退去、先格

之通御主人之御名不申候、帶劍二而罷出引候御太刀御同朋江

相渡

宝曆八寅年十一月十五日

当番

内藤大和守

尾州江罷越候

尾張中納言殿家老

石河伊賀

右於御次御暇拝領物被仰渡御前江罷出披露御取合有之、拝領

物於躑躅之間頂戴

宝曆十三未年四月朔日

当番

土屋能登守

参府

尾張中納言殿家老

石河伊賀守

右御太刀諸大夫之疊目より少下置之披露

但御取合有無不同二候、今日者御取合無之如先格御主人之

御名不申候、御太刀御同朋江相渡

渡辺之部

貞享二丑年六月十七日

当番
堀田豊前守
御暇
紀伊中納言殿使者

元禄三年六月廿一日

当番
伊予守
御暇
尾張大納言殿使者

同五年申八月廿一日

当番
牧野因幡守
御暇
尾張大納言殿使者

同七戌年五月朔日

当番
田村右京大夫
参上
尾張中納言殿家老

元禄十一寅年五月朔日

当番
戸田能登守
参上
尾張中納言殿家老

同十二卯年三月廿八日

当番
井上大和守
尾州江罷越候
尾張中納言殿家老

渡辺半蔵

同年十二月十五日

当番
永井伊賀守
参上
尾張中将殿家来

正徳三巳年正月廿八日

渡辺半蔵

右御目見御太刀目録御奏者番披露

享保十六亥年十二月廿八日

当番
増山河内守
大納言様御婚禮相濟候二付
尾張宰相殿使者

右尾張宰相殿使者渡辺半蔵与披露

同日

自分之御礼

渡辺半蔵

享保二十卯年閏三月廿八日

双方長襦進物番長襦
当番
土井甲斐守
掃国之御礼
尾張殿使者

渡辺半蔵

自分御礼
同人

元文二巳年六月朔日

当番
丹羽和泉守

上使之御礼

尾張中納言殿使者

渡辺主馬

元文二巳年六月廿八日

当番
秋元但馬守

竹千代様御誕生御祝儀

尾張中納言殿使者

渡辺半十郎

右尾張中納言殿使者渡辺半十郎与披露、
其身半袴帶劍

同年十一月朔日

当番
丹羽和泉守

竹千代様御宣參御祝儀

尾張中納言殿使者

渡辺半蔵

自分之御礼

渡辺半蔵

同五申年五月十五日

当番
戸田右近將監

掃国之御礼

紀伊中納言殿使者

渡辺主水

当番

松平豊後守

寛保三亥年四月廿八日

掃国之御礼

尾張中納言殿使者

渡辺半蔵

右披露其身長袴

自分之御礼

渡辺半蔵

双方長袴

右披露長袴

但是者中納言殿家来与八不申候

当番

朽木土佐守

寛保四子年四月廿八日

掃国之御礼

尾張中納言殿使者

渡辺半十郎

右披露相濟御取合有之

但双方半袴無刀

当番

松平主計頭

同年十月十五日

御移替儀表立被仰出候御祝儀

尾張中納言殿使者

渡辺半蔵

家老二付帶劍二而

罷出ル

当番

松平主計頭

延享二丑年十月十五日

御移替之儀表立被仰出候御祝儀

尾張中納言殿使者

渡辺半蔵

寛延二巳年四月廿八日

家老二付帶劍

当番
松平紀伊守

掃国之御礼

尾張中納言殿使者

披露半袴

渡辺半蔵

長袴着用

右尾張中納言殿使者渡辺半蔵与披露

右先格之通半袴二而致披露候旨当番紀伊守右近将監殿江申

達候処先格之通可致旨被仰聞候

自分之御礼

双方半袴

渡辺半蔵

右渡辺半蔵与披露

右中納言殿家来与八披露不申披露長之段右近将監殿江申達

其通相濟

寛延四未年四月廿八日

当番

太田撰津守

掃国之御礼

尾張中納言殿使者

半袴
渡辺半十郎

右尾張中納言殿使者渡辺半十郎与披露御取合有之

但帶劍二而罷出進物御前江不出

宝曆五亥年三月朔日

当番

土岐伊予守

繼目之御礼

尾張中納言殿家来

渡辺半蔵

右御太刀諸大夫之畳目方少下ケ置之披露御取合有之、御太刀

御同朋江披露、進物番共長袴

宝曆十一巳年四月廿八日

当番

大岡兵庫頭

掃国之御礼

尾張中納言殿使者

渡辺半十郎

右尾張中納言殿使者渡辺半十郎与披露

同十四申年三月十五日

当番

土井大炊頭

尾張中納言殿使者

披露半袴

渡辺半蔵

其身長襦

右尾張中納言殿使者渡辺半蔵与披露御取合有之

右先格之通半袴二付致披露候間当番方右京大夫殿江申達其

通相濟

自分之御札

渡辺半蔵

双方長袴

右渡辺半蔵与披露、御太刀諸大夫暈目より下二差置御太刀御

同朋江相渡

附札

先格之通披露、進物番共二

長袴着用致候段同人江

太刀御同朋頭江相渡

右御主人之御名不申候、披露長袴着用先格之通申達其通相

宝曆七丑年四月廿八日

当番

青山因幡守

濟

明和三戌年二月十五日

当番

西尾主水正

若君様御袴着御祝儀相濟候付

尾張中納言殿使者

披露半袴

右尾張中納言殿使者渡辺半蔵与披露御取合有之

但半蔵長袴着用披露、先格之通半袴着用相模守殿江伺之上其

渡辺半蔵

其身長袴

通相濟

自分之御札

渡辺半蔵

右尾張中納言殿使者渡辺半蔵与披露御取合有之而退去

右渡辺半蔵与披露

先格之通半袴二而致

但中納言殿家来与八不申先格之通披露、長袴致着候旨相模

附札

披露相濟申候

守殿江申達其通相濟

自分之御札

双方長袴

同人

水野之部

元禄三年七月十八日

当番
松平彈正忠
上使之御礼
紀伊大納言殿使者

水野太郎作

当番

永井伊賀守

掃国之御礼

紀伊中納言殿使者

水野志摩守

助番

高木主水正

紀伊中納言殿家老

参上

水野淡路守

当番

高木主水正

紀州江罷越候

紀伊中納言殿家老
修理

水野丹波

右於御次拝領物被仰渡御前江罷出候

享保十一年五月十五日

当番
内藤丹波守

掃国之御礼
紀伊中納言殿使者

水野太郎兵衛
河内

享保十五戌年七月朔日

自分之御礼 式部
同人
当番

上使之御礼

紀伊中納言殿使者

水野勘之由

其身半襦帶劍

右中納言殿使者水野勘之由与松平備中殿披露

当番

松平玄蕃頭

享保十七子年五月廿八日

御簾中様御着帶御祝儀二付
尾張中納言殿使者

水野内蔵助

其身半襦無刀

右尾張中納言殿使者水野内蔵助与披露

当番

松平伊賀守

元文元辰年五月十五日

掃国之御礼

紀伊中納言殿使者

水野美濃守

右双方長袴紀伊中納言殿使者水野美濃守与披露御取合有之

自分之御礼

同人

右名披露自分御礼申上候節八美濃守半袴二而相勤候、越中伊

賀紀伊守主水正四人二而致相談候、前々竹腰志摩守も長袴着

候節も長袴二而相勤候段越中江申候得共今日八自分御礼事二

付半袴二而相勤候而も能有之由被申候二付長袴二而能有

之候、併家老之事二候間長袴二而も能有之由懸相談候、尤美

濃守江致稽古可申段申候所、前々も罷出候事二候間夫二者及

不申候由申候二付其通り二而相勤候得与伊豆守殿今日之儀披

露長袴二而相勤候事不宜候段被仰候付、越中伊賀紀伊守主水

正四人中之間二罷在披露不意之儀順阿弥以申達候処伊豆守殿

御用部屋江御呼被成披露之儀不候而者不宜旨被申聞候

元文五申年十二月廿八日

当番

戸田右近将監

宰相殿任官之御礼

御同人使者

水野縫殿

助番

秋元撰津守

掃圀之御礼

紀伊大納言殿使者

水野美濃守

半袴

自分之御礼

水野美濃守

家老二付帶劍二而罷出ル

助番

井上遠江守

家督之御礼

紀伊大納言殿家老

双方長袴

水野大吉

右披露相濟御取合有之

御太刀下方二畳目之中方少下二置之如先格御主人之名不申

候、御太刀常之通御同朋江相渡

寛延三年五月十八日

当番

鳥居伊賀守

掃圀之御礼

紀伊大納言殿使者

披露半袴

水野太郎作

右紀伊大納言殿使者水野太郎作与披露

如先格進物御前江不出

自分之御礼

双方長袴

水野太郎作

右主人之名者不申候

但引候御太刀溜二差置候、今日者半袴二而罷出候故披露も

半袴二而相濟候

同年七月廿八日

当番
大岡越前守

上使之御礼

紀伊大納言殿使者

双方長袴

水野縫殿

右紀伊殿使者水野縫殿与披露御取合有之、帶劍二而罷出

但進物御前江不出

宝曆八寅年四月十九日

当番
阿部伊予守

参府

紀伊中納言殿家老

水野太郎作

右御太刀御敷居之外下方二疊目中下方下二置之披露相濟御取合

無之

如先格御主人之名不申披露進物番共長袴着、引候御太刀溜

御床上之末二置之

同十辰年五月朔日

当番
朽木土佐守

紀州江罷越候付

紀伊中納言殿家老

水野丹後

右於御次御暇拝領物被仰渡御前江罷出披露御取合有之而退去、

拝領物於躑躅之間頂戴

宝曆十三未年九月朔日

当番
土井大炊頭

家督之御礼

紀伊中納言殿家老

双方長袴

水野福二郎

右二疊目下二御太刀ヲ置披露相濟御取合有之而退去、如先格

御主人之名不申其身帶劍二而罷出

安藤之部

貞享二丑年二月十五日

当番
松平備前守

参府
紀伊殿家老
安藤帶刀

当番
土井能登守

同五辰年六月朔日

紀州江罷着之御礼

紀伊中將殿使者
安藤帶刀

当番
安藤対馬守

同年六月三日

御暇

紀伊中將殿使者
安藤帶刀

当番
増山河内守

享保十巳年十月朔日

紀州江罷越候

紀伊中納言殿家来

主水
安藤彦兵衛

右於御次御老中列座御暇拝領物被仰渡御前江罷出安藤彦兵衛

与披露

享保十七子年正月廿八日

当番
井上河内守

紀州江罷越候

紀伊中納言殿家来

安藤帶刀

右於御次拝領物被仰渡御前江罷出候後拝領物於躑躅之間頂戴

一安藤帶刀服紗小袖二而罷出候故鈴木飛州江熨斗目着替可申哉

与坊主を以飛州玄蕃殿其外同役衆江被申談、出仕面々何も熨

斗目着用之儀二候間熨斗目可然与同役衆被申熨斗目被着候様

二と被申越候、伺二も及申間敷と被申伺不被申右之段申越候

一帶刀拝領物之節直二御礼申上候、河内殿御礼被申上候、先彦

兵衛御暇之節も右之通故河内殿江其段申達候

同二十卯年正月十五日

当番
井上河内守

以宿次御鷹之鶴被遣候御礼

紀伊中納言殿使者

安藤忠兵衛

当番

朽木土佐守

寛延元辰年十月朔日

紀州江罷越候

紀伊中納言殿家老

披露半袴

安藤帶刀

右於御次御暇拝領物被仰渡以後御前江罷出安藤帶刀与披露、

相濟御取合有之而上意有之

明和二酉年九月朔日

当番
加納遠江守

家督之御礼

紀伊中將殿家老

安藤吉之助

右二疊目方五寸程間を置御太刀置之披露相濟御取合有之而退

去、如先格御主人御名不申其身帶劍二而罷出

但御直参之通御太刀少下ケ候而置之相濟御同朋江太刀相渡

候、溜江肝煎持参

同年十二月廿八日

当番

朽木土佐守

紀州江御暇

紀伊幸相殿家老

安藤帶刀

右於御次御暇拜領物被仰渡已後御前江罷出安藤帶刀与披露、

御取合上意有之而退去

明和八卯年十一月朔日

当番

井伊兵部少輔

御白書院

相統之御礼

紀伊中納言殿家老

双方長袴

安藤勝之助

兵庫

綿二十把
金馬代

右披露相濟御取合有之而退去

但如先格御主人之御名不申其身帶劍二而罷出御直参之通御

太刀少下ケ候而置之、相濟御同朋江御太刀相渡溜り江肝煎

持参

明和八卯年十二月十八日

当番

井伊兵部少輔

紀伊殿家老

安藤勝之助

右紀伊殿依御願諸大夫被仰付之旨於御白書院御縁頼御老中列

座右京大夫殿被仰渡之

同年十二月廿八日

当番

小出伊勢守

御白書院

紀州江御暇

紀伊中納言殿家老

対馬

安藤帶刀

縮緬五卷

右於御次御暇拜領物被仰渡以後御前江罷出安藤帶刀与披露、

御取合上意有之而退去

中山之部

元禄三年四月廿一日

当番
三浦壹岐守
参上

水戸宰相殿家老

中山備前守

当番

本多弾正少弼

初而御目見

中山備前守弟

中山主殿

右水戸中納言殿家来中山主殿与披露、
当番本多弾正少弼御用
番土屋相模守殿江相伺右之通也

宝永五子年五月廿八日

当番
池田丹後守

水戸江罷越候

水戸中納言殿家老

中山備前守

当番

松平対馬守

水戸中納言殿家老

繼目之御礼

中山内記

当番

井上河内守

享保十五戌年六月朔日

鶴千代殿家老

中山備前守

右中山備前守与戸田越前殿披露、上意有之

当番

小堀和泉守

寛延元辰年四月朔日

初而御目見

水戸殿家老

双方長袴

中山大膳

右太刀二疊目下二置披露相濟御取合有之而退去、如先格御主人之名不申其身帶劍二而罷出、引候御太刀御同朋江渡ス

志水之部

元禄三年八月十五日

当番
伊予守
尾張中納言殿使者
尾張大納言殿使者
志水甲斐

同十一寅年五月十五日

御暇
尾張中納言殿使者
志水甲斐
当番
永井伊賀守
尾張中納言殿使者
尾張大納言殿使者
志水甲斐

同十八日

御暇
尾張大納言殿使者
志水甲斐
当番
因幡守
尾張大納言殿使者
志水甲斐

享保八卯年四月廿一日

当番
増山河内守
尾張中納言殿使者
尾張大納言殿使者
志水甲斐
但馬

同五申年七月朔日

当番
松平壹岐守
尾張大納言殿使者
志水甲斐

其身熨斗目半襠帶刀

右尾張中納言殿使者志水甲斐与土屋但馬殿披露

同四日

尾張大納言殿使者
志水甲斐
当番
永井伊賀守
御暇
尾張大納言殿使者
清水平斐

同十巳年四月廿日

当番
松平玄蕃頭
尾張中納言殿使者
尾張大納言殿使者
志水甲斐
備中

同九子年六月朔日

当番
久世出雲守
尾張大納言殿使者
志水甲斐

右尾張中納言殿使者志水甲斐と太田備中殿披露

同十六亥年四月廿八日

松平玄蕃頭当番差替
松平備中守
尾張中納言殿使者
尾張大納言殿使者
志水甲斐

元禄九子年六月十三日

当番
伊予守
尾張中納言殿使者
志水甲斐

右尾張殿使者志水甲斐与披露

尾張宰相殿使者
志水甲斐
尾張中納言殿使者
尾張大納言殿使者
志水甲斐

宝曆九卯年四月廿八日

当番
松平周防守

掃圀之御礼

尾張中納言殿使者

志水甲斐

右尾張中納言殿使者志水甲斐与披露

右尾張中納言殿使者志水甲斐与披露御取合有之而退去

自分之御礼

同人

同十三未年四月廿八日

当番
松平和泉守

掃圀之御礼

尾張中納言殿使者

志水甲斐大炊

右尾張中納言殿使者志水甲斐与披露

一甲斐自分御礼之節宝曆十三未年四月廿八日之例を以飛驒守土佐守江相談有之、去申年水戸殿在所到着之御礼使者山野辺兵庫頭自分御礼之節ハ長袴二而出候二付、右例之儀其日美濃守

自分之御礼
志水甲斐土能登

右志水甲斐与披露其身長袴披露半襠二而相濟候、尤其段左衛門尉殿江申達候、但

右御太刀諸大夫之畳目より少下ケ
置之披露相濟御取合有之而退去

右自分之御礼太刀目錄を以御目見諸大夫之畳目より少シ下ケ

候
一志水甲斐太刀御障子之方江引申候
一同人御礼稽古御附家老二而無之二付御白書院二而有之

置之御主人之御名不申志水甲斐与披露其身長袴二而罷出候、

披露着服之儀先格難相知区々二付左衛門尉殿江当番方被伺候

処披露半袴可致着用旨被仰聞候間披露進物番共半袴着用二て

相濟申候、尤引候太刀小溜二差置申候

明和二酉年六月十五日

当番
酒井飛驒守

明和四亥年六月朔日

当番
内藤大和守

家督之御礼

尾張中納言殿家老

双方長袴

志水甲斐

右二疊目下方少下二御太刀置之披露相濟御取合有之而退去、

如先格御主人之御名不申候、其身帶劍二而罷出

但御直参之通御太刀少シ下ケ候而置之相濟御同朋江御太刀

相渡溜二肝煎持参

一志水甲斐家督之御礼当番御城附江懸合候処只今迄家督之御礼無之依願御礼申上候故先格無之候、依之当番大和守家督御礼申上候先格無之間長袴之儀如何可仕哉之段右近將監殿江以順阿弥被伺候処、石河伊賀家督御礼之例御尋之処享保十九四月廿八日例有之処長袴之儀難相知候得共参府二者長袴之旨申上候処、参府之通相心得候様被仰出披露進物番共長袴相濟申候、太刀疊目之儀前々志水甲斐御附家老二而無之二付二疊目下方五寸程間を置差置候処、大和殿能登殿兵庫殿申談有之今日者御附家老之通り二而相濟申候

但只今迄自分御礼之節ハ其身長襠披露半襠二而濟来候間其訳大和殿江美濃守申候得共、自分御礼と家督与ハ違候間被申聞右之通相濟申候、猶重而ハ評議も可有之義と存候

一志水甲斐例渡辺半蔵二而可然哉之旨加遠江殿土佐殿江被聞

合候処例二者難相成旨被申越候

明和四亥年六月十五日

当番
大岡兵庫頭

尾州江罷越候
御同人家老
志水甲斐

右於御次老衆列座拜領物被仰渡御前江罷出披露御取合有之而退去

明和六丑年五月十五日

当番
土岐美濃守

掃国之御礼
尾張中納言殿使者
志水甲斐

右尾張中納言殿使者志水甲斐与披露御取合有之而退去

繡紗二卷
銀馬代

披露半袴
自分之御礼 其身長袴
同人

右清水甲斐与披露

△右近將監殿江以三阿弥相同先格之通披露、進物番共長袴二而相濟申候

但御主人之御名者不申候、御太刀之疊目並家老之通進物ハ御敷居之外下方二疊目下之方二置之、御太刀ハ披露人大廊

下二而請取之出札相濟候而溜り江引

一志水甲斐明和四亥年六月朔日家督御札之節者伺之上石河伊賀
守通与御差図有之長袴二而相濟候、右之節者御太刀肝煎持参
引候御太刀も御同朋江相渡候得共自分御札之節ハ前々半袴二
而披露御太刀も当人方請取溜り江引候付、今日ハ先格之通半
袴二而御披露相勤候段伺之上本文之通相濟候、尤家督御札之
節ハ長袴二而相濟候へ共自分御札之節者先格半袴二而有之候
段御同朋頭迄咄置候事

山野辺之部

宝曆八亥年十二月十五日

当番
内藤大和守

右水戸宰相殿使者山野辺兵庫頭与披露御取合有之

在所到着之御札
水戸宰相殿使者
自分之御札
同人

山野辺兵庫頭

右御太刀諸大夫之疊目方少下二置之披露相濟御取合有之而退
去

但御主人御名不申候

宝曆十四申年十二月十五日

当番
土岐美濃守

在所到着之御札
水戸宰相殿使者
山野辺兵庫頭

右水戸宰相殿使者山野辺兵庫頭与披露御取合有之而退去
但先格之通進物御前江不出

自分之御札
双方長袴

山野辺兵庫頭

右御太刀諸大夫之疊目方少下置之披露相濟御取合有之而退去

但御主人之御名不申

明和元年閏十二月十五日

当番
土岐美濃守
在所到着之御礼
水戸宰相殿使者

右水戸宰相殿使者山野辺兵庫頭与披露御取合有之而退去

自分之御礼
双方長袴
同人

右御太刀諸大夫之畳目方少下置之披露相济御取合有之

但御主人之御名不申候

明和四亥年十月十五日

当番
加納遠江守
参府
水戸中将殿家老
双方長袴

山野辺兵庫頭

右御太刀諸大夫之畳目方少下置之披露相济御取合無之

但御主人之御名不申

明和七寅年七月廿八日

当番
土屋能登守
参府
水戸宰相殿家老
双方長袴

紗綾三卷
銀馬代

右御太刀諸大夫之畳目方少下置之披露相济御取合無之

但御主人之御名不申

山野辺主税
美濃

附札

山野辺主税御礼先格難相知二付
御役衆申談山野辺兵庫頭参府
御礼之節之通相心得可申哉之旨
周防守江以三阿弥相伺候処、可
致其通旨申聞兵庫頭御礼之通相
济申候

明和九辰年二月十五日

助番

小出伊勢守

参府
水戸宰相殿家老
双方長袴

紗綾三卷
銀馬代

右御太刀諸大夫之畳目より少下置之披露相济御取合無之

但御主人之御名不申

山野辺主税
对馬

寺社披露之部

一天和元酉年正月六日内宮外宮与前々披露仕候処伊勢内宮外宮
与披露仕候事

一同二戌年御三家使者并紫衣之僧又八僧正杯之披露自今以後老
中之下座二而奏者番披露仕候事

元禄二巳年五月五日

当番 永井伊賀守
山王别当 観理院権僧正
同所神主 日吉大膳

右披露僧正二成候間如何可仕与相同候処元之通可仕旨被仰聞
候二付山王别当与披露之

元禄三年午五月五日

当番 永井伊賀守
山王别当 観理院権僧正
同所神主 日吉大膳

右例山王别当与披露有之候、僧正成已後も同断二候得共当正
月名披露御座候間相同候処、やはり山王别当与披露候様被仰

聞其通相濟

元禄三年十月朔日

当番 三浦壹岐守

右南都興福寺惣代与朽木伊予守披露之

南都 興福寺惣代
五師 宝蔵院
役者 明皇院

春日大明神

大木右近

同所正預

大西大蔵

同所若宮神主

千鳥右京

右一同罷出春日神主与披露

同所祓宜惣代

久保奎助

大見谷帯刀

右春日祓宜惣代与披露

当番

朽木伊予守

山王别当

観理院権僧正

同所神主

日吉大膳

自今以後名披露二仕候様豊後守殿奏者番江被仰渡之

当番

松平弾正忠

元禄五申年四月朔日

入院御礼

黄檗山

万福寺

黄檗山首座

昂空

同所当家

晦翁

右大休江外進物一同二出之両僧も一度二罷出御目見

宝永二酉年五月廿三日

当番

安藤長門守

右両僧一度二出ル、進物茂同前

一元禄六酉年四月御門跡御上京之節御礼之時御勝手より役者三

人何茂名披露之由、御縁一同坊官三人是ハ御門跡家来と計二
而名披露二而無之由

元禄九子年三月廿八日

当番

久世出雲守

豊前

彦山座主権僧正

進物御敷居之内二晝目

宝永七寅年三月朔日

一奥州柳津円蔵寺初而御次一同二而御目見名披露之旨被仰出候

元禄九子年五月廿八日

当番

青山播磨守

繼目之御礼

黄檗

万福寺

黄檗首座

大休

同所当家

江外

被仰聞候、為御心得申進候

但明日紅葉山江御参詣之旨被仰出候也

宝永七寅年三月朔日

当番

本多弾正忠

奥州柳津

□蔵寺

(円力)

右今日方名披露二被仰出候事

宝永七寅年八月十五日

当番

松平備中守

南都

興福院

熊野那知山

実方院

右実方院儀名披露二而無之候得共興福院一人名披露二而実方

院披露無之候而ハ如何二候間名披露二可然哉と河内守殿江彈

正少弼相同候処、以来例二ハ成間敷哉と河内守殿御申二付此

度者遠国之寺院外二並も無之旨申候処、左候ハ、致披露重而

之例二ハ不罷成候様二被仰渡候事

正徳元年寅三月朔日

当番

松平備前守

御次一同

南都
龍松院

奥州柳津

円藏寺

八幡山上惣代

太西坊

今日御礼之僧侶何茂名披露二而候故但馬守殿江寺社奉行衆方被相伺八幡山惣代与披露有之候、向後之例二者不相成候段為申聞候事

一法然上人贈国師号被仰付増上寺大僧正元禄九年十一月朔日御礼被申上候、ケ様之節八自分御礼二而候ハ、披露進物番共二半袴二而勤可申旨土屋相模守殿被仰聞候事

一御府内之寺院ハ所ハ不申名計申候、池上本門寺品川東海寺杯も所ハ不申候、遠国之寺院ハ所ハ申候

一寺社長キ号有之時ハ其時二至伺之上略之披露申候

例

享保三戌年十二月朔日

当番
高木主水正

一京東山光雲寺五山惣代碩長老黄衣西堂惣代鎌倉建長寺新源庵瑑長老御目見之時河内守殿寺社奉行衆伺之上碩長老ヲバ五山紫衣惣代与披露、瑑長老ヲハ五山黄衣惣代と披

露有之候

一加茂社人名ハ不申社人与申候

一芝崎豊後ハ明神神主与披露

一伊吹左門ハ名披露

一豊前彦山座主ハ御前江帯剣二而罷出候

例

享保五子年七月廿八日

当番
松平能登守

一豊前彦山座主次目御礼之節小キ刀帯候俣御前江罷出候、右帯剣之儀先格難相知候二付河内守殿江牧野因幡守伺之上帯剣二而出候様二と被仰聞其通り相濟候

明和元年九月朔日

当番
土井大炊頭

一豊前英彦山座主僧正継目御礼御白書院独礼献上一束一卷御敷居之内二而御礼申上候二付右京大夫殿江伺之上無刀二而差出候様被申聞其通り相濟申候、豊前英彦山座主僧正と披露相濟申候

一大僧正并権僧正ハ何大僧正何権僧正と申候、正僧正ハ正ノ字不申只僧正と計申候

正徳三巳年二月朔日

御代替之御礼

同

同

同

同

右何茂名披露二而相済

同年二月十五日

右名披露二而相済

右同断

正徳四年午七月朔日

当番
三浦長門守

日光山目代
山口図書

東叡山目代
田村権右衛門

久能山目代
星伝右衛門

山口図書
山口権六

星伝右衛門
星与左衛門

当番
安藤右京亮

南都
龍松院

富士村山
辻之坊

同所
大鏡坊

当番
松平兵庫頭

住職之御礼
増上寺大僧正

大僧正之御礼
右同人

先頭誉大僧正住職并大僧正之御礼申上候節ハ初メニ進物ヲ以

御礼申上候、御次迄退去進物引之右畢而又進物を以重而出座

大僧正之御礼申上候、此節直ニ御敷居之内御右之方着座其内

進物引之候得共此度者御幼年故進物一通御前江出之住職并大

僧正之御礼申上、尤奏者番披露御老中御取合有之直ニ退去外

一通之進物者御前江不出直ニ御納戸江納之披露之、奏者番并

進物番何も長袴着用

正徳四年午十月廿八日

納経之御礼

右披露知恩院代僧と計御披露

宝曆十一巳年十月十五日

納経拜礼之御礼

右知恩院代僧与披露

当番
松平備前守

知恩院方丈代僧
専称寺

当番
松平和泉守

知恩院前大僧正代僧
信行寺

金地院

護持院大僧正

護国寺僧正

大護院

右向後五節句御礼之節名披露二不及候

七月

右書付享保元丙申年七月七日豊後守殿御渡候由二而松平対馬
守廻状二添来ル

享保二酉年四月朔日

当番
松平備前守

一知恩院六役天性寺山役浩徳院卜披露可致哉と大和守殿江寺社
奉行衆被伺候処、知恩院役者と計可致披露旨被仰聞候由寺社
奉行衆被申聞候二付致其通候

享保十二未年二月廿八日

正僧正之御礼

当番
小出信濃守
武州仙波
喜多院僧正

右仙波喜多院僧正与披露

明和元年十二月十五日

正僧正之御礼

当番
酒井飛驒守
世良田長楽寺
願王院正僧正

右世良田願王院僧正与披露

享保十六亥年四月五日

助番
松平玄蕃頭

一日光御門跡御登山并御上京二付御登城御対顔此時御供被召連
候役者兩人御黒書院二而御目見名披露、御板縁二而坊官兩人
家司兩人御目見何も名披露之事

一豆州三嶋明神主八名を不申三嶋神主と披露之、享保十九寅

六月朔日井上河内守右之通披露申候

近例 明和元申閏十二月十五日

当番
土岐美濃守

一豆州三嶋明神主御礼之節豆州三嶋明神主与披露相濟
申候

一出雲大社兩國造名代兩人出候事も老人出候事も有之、一人二
而も兩國造名代と披露申候

享保十年十一月十五日

一雲州大社兩國造名代兩人出候二付雲州兩國造名代与披露相濟
申候

申候

例 延享元子十二月朔日

当番
松平紀伊守

一出雲大社兩國造名代御造營御礼兩人出候二付、享保十巳
年御造營勸化之御礼兩人一同罷出進物も一緒二差出候例

二而兩人一同罷出出雲大社兩國造名代与披露相濟申候

延享五辰年二月十五日

当番
井上遠江守

一出雲大社兩國造名代御造營御礼一人出候二付出雲兩國造
名代と披露相濟申候

一僧都ハ不申候

但御門跡方之院家之大僧都少僧都ハ其通りニ致披露申候

例

延享三寅四月廿八日

当番
秋元但馬守

一若王子大僧都継目御礼之節若王子大僧都と松平主計頭殿

披露相済申候

一惣代ハ三井寺惣代或ハ山門惣代、町人も奈良惣代大津惣代杯

と致披露候

一万福寺御礼之時役僧罷出候得者万福寺役者何と名披露いたし

候事

但旧格者名披露無之万福寺役僧と計披露申候

享保二十卯年四月廿八日

当番
土井甲斐守

住職之御礼

黄檗
万福寺

万福寺役僧

石門

万福寺役僧

大湖

御礼書ハ兩人一所二つり有之候得共進物銘々差上候付寺社奉

行衆相談之上左近殿江被相同一人ツ、罷出ル

寛延二巳年三月二日

当番
鳥居伊賀守

一日光御門跡近々御上京ニ付御登城御対顔此時御供被召連候役

者老人御黒書院ニ而御目見名披露、同板縁ニ而坊官兩人家司

老人御目見何茂名披露、坊官家司之所ニ附札ニ而先格之通名

披露ニ而相済申候与有之候

元文五申年閏七月朔日

当番
永井伊賀守

住職之御礼

黄檗
万福寺

万福寺役僧

百拙

同

教外

右進物銘々差上候間如近例名披露ニ而相済、尤万福寺役僧百

拙万福寺役僧教外与披露有之

例

宝曆十一巳年二月十五日

当番
森川内膳正

一黄檗万福寺役僧時学御礼之節万福寺役僧時学与披露

明和二酉年十二月十五日

当番
朽木土佐守

住職之御礼

黄檗
万福寺

万福寺役僧
時学
同
雲宗

右進物銘々差上候間如近例名披露二而相濟、尤万福寺役僧時

学万福寺役僧雲宗与披露有之

一 寺社奉行方差出候書付左之通

享保十五戌年

一 二月廿二日对馬守殿江差出候書付

耳書

紅葉山御参詣之節御奏者番御披露相止候儀申上候書付

土岐丹後守

覚

一 紅葉山御参詣之節先々御奏者番御披露有之候処何頃方相

止候哉之儀致吟味候得者、正徳二年迄御披露之儀扣二相

見享保元申年方御披露之扣不相見候間当御代より相止候

与奉存候、何故御披露相止候と申儀相知不申候

二月

享保十二未年四月十五日

当番
松平玄蕃頭

御次一同

御暇

駿府御武具奉行

大原又右衛門

主水

次目之御礼

長崎諏訪神主

青木兵部

参上

鉄炮張

国友徳左衛門

同

同

同 善兵衛

右大原又右衛門遠国社家国友徳左衛門善兵衛与披露

同十八丑年十二月廿八日

御次一同

当番

松平玄蕃頭

次目之御礼

長崎諏訪明神神主

青木若狭

式部

参上

連歌師

歳替之御礼

銀座之者共

同

円阿弥

右長崎明神神主連歌師共銀座之者共円阿弥与披露

当番

松平紀伊守

延享三寅年六月朔日

御次一同

享保十九寅年六月朔日

御次一同

右三嶋明神主与披露

明和元年閏十二月十五日

御次一同

附札

御代替之御礼 秋棋津
遠国神社

伊勢大湊

角屋七郎次郎

遠国神社伊勢大湊町人

角屋七郎次郎右之通

披露相濟申候

当番

井伊因幡守

繼目之御礼

豆州三嶋大明神主

河内
矢田部伊織

当番

土岐美濃守

参上

遠州 大和

二諦坊

繼目之御礼

豆州三嶋大明神主

矢田部式部

初而御目見

栄川倅

狩野養川

右遠州二諦坊三嶋明神主狩野養川京釜屋弥右衛門与披露

参上

京都釜屋

弥右衛門

延享三寅年四月廿八日

御次一同

当番

秋元撰津守

御代替之御礼

遠国神社

但此内

尾州一宮神主佐分式部

尾州津嶋神主氷室兵部

繼目之御礼申上候

当番

久世出雲守

繼目之御礼

長崎諏訪明神主

土能登
青木若狭

参上

銀座年寄

中村吉右衛門

右長崎明神主銀座年寄と披露

廻状附札

長崎明神主銀座年寄と披露相濟申候

其段周防守殿江無急度順阿弥を以申達候

明和三戌年正月十五日

当番
大岡兵庫頭

入院之御礼

知恩院方丈使僧
法音寺

右知恩院方丈与披露御取合無之

但宝曆三酉年七月朔日入院之御礼知恩院方丈使僧披露相濟

御取合有之、同四戌年十二月十五日同断二付使僧披露相濟

御取合有之、同十四申年正月廿八日同断二付使僧御取合無

之、右之通御取合有之区々二有之候処今日茂本文之通御取

合無之相濟候事

東京阿部家資料 文書編(15)

発行日 二〇二六年(令和八年)三月三十一日

編集 福山市経済環境局文化観光振興部文化振興課

歴史資料室

〒七二〇・〇八一二

福山市霞町一丁目一〇番一号

TEL 〇八四・九三二・七二六四

発行 福山市教育委員会

印刷・製本 株式会社かもめいと